

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第53集

館林市内遺跡発掘調査報告書

—平成26・27年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査—

間堀1遺跡 (平26地点)

館林城跡・城下町 (平27地点)

子ノ神1遺跡 (平27地点)

2015
館林市教育委員会

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第53集

館林市内遺跡発掘調査報告書

—平成26・27年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査—

間堀 1 遺跡 (平26地点)

館林城跡・城下町 (平27地点)

子ノ神 1 遺跡 (平27地点)

2015
館林市教育委員会

例 言

1. 本書は、平成26・27年度に国宝重要文化財等保存整備事業費補助金、群馬県文化財保存事業費補助金を受けて実施した館林市内遺跡発掘調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書において報告する遺跡名は、「遺跡台帳」に基づき以下のとおりである。地点名は、平成26年度の調査地点は「平26地点」、平成27年度の調査地点は「平27地点」とする。
間堀 1 遺跡 館林城跡・城下町 子ノ神 1 遺跡

なお、平成27年度は笹原遺跡（平成28年1月18日～1月21日）・下遺跡（平成28年2月26日～3月1日）・咄戸沼遺跡（平成28年3月18日～3月末）においても発掘調査が実施されているが、報告は平成28年度以降を予定する。

3. 調査組織は次のとおりである。

| | | | |
|-------|-----------|--------------------|--|
| 調査主体者 | 館林市教育委員会 | | |
| 担当課 | 文化振興課文化財係 | | |
| 調査組織 | 教育長 | 橋本 文夫（平成28年3月5日まで） | |
| | | 吉間 常明（平成28年3月6日から） | |
| | 教育次長 | 坂本 敏広 | |
| | 文化振興課長 | 岡屋 英治 | |
| | 文化財係長 | 荒川 博一 | |
| | 係長代理 | 阿部 弥生 | |
| | 主任 | 吉村 昭和 | |
| | 主任 | 田沼 美樹 | |
| | 主任 | 奈良 純一（担当） | |
| | 主事 | 金子 陽祐（副担当） | |

4. 調査作業員・整理作業員（50音順敬称略）
小倉 政義 久保田 憲司 小島 鉄男 坂口 丈夫 杉田 和実 寺嶋 美雪
西谷 義信 原田 和沙 久田 進 前田 清美 三橋 瑞江 渡邊 正敏
5. 出土遺物、調査記録及び資料は、館林市教育委員会で保管している。
6. 本書の編集・執筆は、奈良が中心として行った。
7. 遺物の実測及びその他の図版の作成は、奈良、原田、前田、三橋で行った。
8. 調査の実施及び本書刊行にあたり、下記の諸氏・諸機関のご協力を頂いた。ここに記して感謝を申し上げます。次である。（順不同、敬称略）
地権者各位 群馬県教育委員会事務局文化財保護課（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
館林市都市建設部都市計画課・道路河川課、館林市環境水道部水道課・下水道課 館林市農業委員会
館林市史編さんセンター

凡 例

1. 本書における挿図の縮尺は、図中に記した。
2. 遺跡位置図は、館林市都市計画図（S=1/2500）を用いた。なお位置図中のスクリーントーン■は周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）の範囲、■は調査地点、■は実際に掘削した調査区の範囲を示している。
3. 土層断面及び出土遺物の注記に用いた色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・一般財団法人日本色彩研究所監修「新版土色帖」に従った。一部、調査担当者の日視による判断が含まれる。

参考文献

本書を作成するにあたり以下の文献を参考にした。

- 館林市教育委員会 『館林市埋蔵文化財発掘調査報告書』 第1集～第52集
館林市教育委員会 『館林市史 特別編第3巻 館林の自然と生きもの』 2008
館林市教育委員会 『館林市史 特別編第4巻 館林城と中近世の遺跡』 2010
館林市教育委員会 『館林市史 資料編第1巻 館林の遺跡と古代史』 2011
館林市教育委員会 『館林市史 通史編第1巻 館林の原始古代・中世』 2015
館林市教育委員会 『館林双書第4巻』 1974
館林市教育委員会 『館林古環境復元図 館林城郭・城下町図』 2014
（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団編 『群馬の遺跡7 中世～近代』 2005
黒澤照弘 『館林市における土師器皿の変遷-15～17世紀を中心に-』 2009
（『館林市史研究 おはらき』 第3号抜刷）

目 次

例 言

凡 例

参考文献

目 次

挿図目次

写真図版目次

| | |
|--------------------|-------|
| 第1章 館林市の環境 | 1~2 |
| 1. 地理的環境 | 1 |
| 2. 歴史的環境 | 1~2 |
| 第2章 本発掘調査の概要 | |
| 1. 間堀1遺跡(平26地点) | 3~8 |
| 第3章 試掘確認調査の概要 | 9~27 |
| 1. 館林城跡・城下町(平27地点) | 9~12 |
| 2. 子ノ神1遺跡(平27地点) | 13~27 |

写真図版

報告書抄録

挿図表目次

第1図 館林市の位置

第2図 館林市の地形概念図

第3図 調査遺跡の位置

【間堀1遺跡(平26地点)】

第4図 間堀1遺跡(平26地点)

第5図 基本土層図

第6図 間堀1遺跡(平21地点) トレンチ配置図

第7図 調査区平面図、断面図

第8図 住居跡平面図、断面図

第9図 出土遺物実測図①

第10図 出土遺物実測図②

【館林城跡・城下町(平27地点)】

第11図 館林城跡・城下町(平27地点)

第12図 トレンチ配置図、平面図、断面図、基本土層図

第13図 出土遺物実測図①

第14図 出土遺物実測図②

【子ノ神1遺跡(平27地点)】

第15図 子ノ神1遺跡(平27地点)

第16図 A~C区トレンチ配置概略図

第17図 A区トレンチ配置図

第18図 A区1トレンチ平面図

第19図 A区6トレンチ平面図、2土坑断面図

第20図 A区8トレンチ平面図、断面図

第21図 B区トレンチ配置図

第22図 B区4トレンチ平面図

第23図 B区14トレンチ平面図、断面図

第24図 B区7トレンチ平面図

第25図 C区トレンチ配置図

第26図 C区3トレンチ平面図、断面図

第27図 C区5トレンチ平面図

第28図 C区10トレンチ平面図、断面図

第29図 C区11トレンチ平面図、断面図

第30図 C区15トレンチ平面図

第31図 出土遺物実測図①

第32図 出土遺物実測図②

第33図 出土遺物実測図③

写真図版

間堀1遺跡(平26地点)

- 1-1 土木重機による掘削
- 1-2 調査区全景(北から)
- 1-3 15, 18土坑遺物出土状況(西から)
- 1-4 1号住居調査途中(南から)
- 1-5 1号住居内北側ベルト断面(南から)
- 1-6 1号住居内東側ベルト断面(西から)

館林城跡・城下町(平27地点)

- 2-5 土木重機による掘削
- 2-6 1 T断面(西から)
- 2-7 2 T断面(東から)①
- 2-8 2 T断面(東から)②
- 3-1 1 T(南から)
- 3-2 2 T(南から)

子ノ神1遺跡(平27地点)

- 4-3 調査地全景
- 4-4 土木重機による掘削

[A区]

- 4-5 1 T(南から)
- 4-6 1 T(北から)
- 4-7 1 T内1溝(北から)
- 5-1 1 T内2溝(北から)
- 5-2 6 T(南から)

[C区]

- 6-3 2 T(北から)
- 6-4 3 T(南から)
- 6-5 11 T(南から)
- 6-6 2 T内11溝および土坑群(北から)
- 6-7 11 T断面(西から)
- 7-1 5 T内3溝(南から)

- 1-7 1号住居完掘(東から)
- 1-8 1号住居完掘(西から)
- 2-1 1号住居完掘(北から)
- 2-2 調査区内西壁断面(東から)
- 2-3 調査区内北壁断面(南から)
- 2-4 調査区完掘全景(南から)

- 3-3 2 T(北から)
- 3-4 2 T内遺物集中箇所(西から)①
- 3-5 2 T内遺物集中箇所(西から)②
- 3-6 2 T内遺物集中箇所取り上げ後(西から)
- 3-7 2 T内遺物集中箇所取り上げ後(南西から)
- 4-1 2 T断面(構築物跡か 東から)
- 4-2 2 T断面(構築物跡か 北東から)

- 5-3 8 T(南から)
- 5-4 6 T内2土坑(井戸か 南から)
- 5-5 8 T内5土坑(西から)

[B区]

- 5-6 4 T(南から)
- 5-7 7 T(南から)
- 5-6 14 T(北から)
- 6-1 13 T 5溝群(北から)
- 6-2 14 T 6溝群(西から)

- 7-2 5 T内3溝(北から)
- 7-3 10 T内6溝(北から)
- 7-4 10 T内6溝(南から)①
- 7-5 10 T内6溝(南から)②
- 7-6 15 T内8溝(南から)①
- 7-7 15 T内8溝(南から)②
- 7-8 15 T内9溝(南から)

出土遺物写真

第1章 館林市の環境

1. 地理的環境



第1図 館林市の位置

館林市は、群馬県の南東部、関東地方のほぼ中央部に位置する人口約8万人の都市である。市域は東西約15.5km、南北約8.0kmと東西に長く、総面積は約60km²である。北は渡良瀬川を隔てて栃木県に、東は邑楽郡板倉町に、南は谷田川を隔てて邑楽郡明和町に接する。明和町の南には利根川が東流し、群馬県-埼玉県県境となっている。県庁所在地の前橋市までは約50km、東京（台東区浅草）へは約65kmの距離にあり、首都圏との結びつきも強い。

群馬県東南部は、「邑楽・館林」地域と呼ばれ、群馬県の中では低地に位置している。館林市の標高は、15m台（大島町東部）から33m台（高根町）であり、おおむね平坦であるといえる。本市の地形を概観すると、「低台地」と「低地帯」に分けることができる。市域中央部に「低台地」が東西に延びるように所在し、その周辺に「低地帯」が広がる。

この「低台地」は、「邑楽・館林台地」と呼ばれる洪積台地であり、太田市高林から本市中央部を東西に延び、隣接する板倉町まで続いている。

また、大泉町古海から本市高根町に至る台地北側に沿って、日本最古の砂丘の一つである埋没河畔砂丘（館林古砂丘）が走っており、本市最高標高点はこの上にある。

「低地帯」は、おもに利根川や渡良瀬川によって形成された沖積低地である。台地北側の低地帯には、旧河道、微高地や自然堤防が目立ち、一方、台地南側の低地帯では、茂林寺沼など大小の沼や湿地帯が形成されている。こうした台地や低地などからなる本市の地形は、北西から南東へ向かって緩く傾斜する傾向が見られ、台地面と低地面の比高差も北部で大きく南部では小さくなっている。「邑楽・館林台地」と呼ばれる洪積台地は、沖積低地から延びる多くの谷地により樹枝状に開析されている。そのなかでも市内最大の谷は、本市中央部を東流する鶴生田川及び城沼にかけての谷で、台地を南北に二分している。こうした洪積台地を開析する谷には、他にも茂林寺沼、蛇沼、近藤沼などの池沼を伴うものが多く、本市景観の特徴の一つとなっている。

2. 歴史的環境

館林市内に所在する遺跡は、145ヶ所である。昭和63年刊行の『館林市の遺跡』（市内遺跡詳細分布調査報告書）では、そのうちの144ヶ所について詳細が報告されている。

分布調査による採集遺物から大別した、各時代の遺跡数は次のとおりである。

旧石器時代の遺跡3遺跡、縄文時代の遺跡13遺跡（縄文土器のみ採取できた遺跡）、弥生時代の遺跡は0（弥生時代の遺物を採取できた遺跡2遺跡）、古墳時代～平安時代の遺跡（土器器の出土した遺跡）96遺跡（うち縄文時代の遺物も採取できる遺跡は23遺跡）、古墳は17遺跡（古墳総数25基）、中世生産址1遺跡、中世城館址12遺跡、近世城館址2遺跡である（ただし、複合した時代の遺物散布地が見られるため、その中心になると考えられる時代でまとめた）。

これらの遺跡の分布は、地形的な特徴と大きく関わっていることが観察される。館林市内に所在する遺跡の時代的変遷と地形的な関わりを概略してみると、次のようになる。

＜旧石器時代＞

この時代の遺跡は、市内の標高の高い地域に集中する傾向を見せる。邑楽・館林台地の北西に沿って、鞍掛山脈と地元と呼ばれる埋没河畔砂丘（館林古砂丘）上に、その多くが確認されている。現在までに確認されている石器の量や石材の種類は小単位であり、長期間にわたる生活の場は見つかっていない。

＜縄文時代＞

この時代になると確認できる遺跡数が増えるとともに、それらが洪積台地上に営まれた様子を見ることも出てくる。前期や中期の遺跡は、池沼や谷地を望む舌状台地上の平坦面に確認されることが多い。後期以降になると遺跡数は減少し、その所在は台地の斜面から微高地に移る傾向がある。後・晩期の包含層等は低地（沖積地）におよぶ。

＜弥生時代＞

弥生時代の遺物は、微高地や台地で少量が確認されている。遺構では、「遺溝遺跡」2号住居が弥生時代後期末（あるいは古墳時代初期）のものであり、市内では唯一の確認事例である。弥生時代の遺物・遺構の確認事例が少ないのは、当時の集落が市内の低地に営まれており、その調査が現時点で進んでいないためとする意見がある。

＜古墳時代＞

前期の遺跡は少ない。遺跡は、洪積台地の斜面からテラス状の微高地に所在することが多く、この傾向は、弥生時代の遺物散布に似ている。中期には、遺跡の数が増えるとともに、その所在は、台地の斜面から台地上の平坦面へ移行する。後期には遺跡数が増大し、台地上の平坦部に所在する場合が多い。墳墓としての古墳は、25基が残存している。古墳群が2ヶ所あり、一つは日向町を中心とする邑楽・館林台地上、もう一

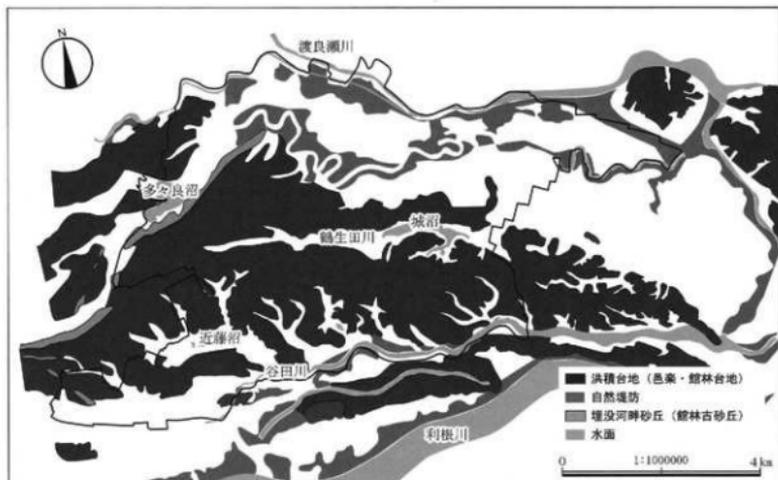
つは高根町を中心とする埋没河畔砂丘（館林古砂丘）上にある。その他は単独のものが多く、いずれも谷や谷地等を見下ろす洪積台地上に所在している。

《奈良・平安時代》

この時代の遺跡は市内で数多く確認されている。特に、台地上部の広い範囲で遺物の採取ができる。このことは、この時代以降、台地上に普遍的に集落等が営まれてきたことを示唆している。

《中世・近世》

中世の城館址については伝説的な要素が多く、実体が明確でない部分がある。中世末に館林城が築かれ、近世には城を中心とした城下町が形成された。



第2図 館林市の地形概念図



第3図 調査遺跡の位置

第2章 本発掘調査の概要

1. 間堀1遺跡（平26地点）



第4図 間堀1遺跡（平26地点）（1:2500）

所在地 館林市上赤生田町字上ノ前3466番10
調査原因 個人住宅
調査期間 平成27年2月1日～2月28日
調査面積 約143㎡

(1) 遺跡と周辺環境

「間堀1遺跡」は館林市街地の南東方向、東武伊勢崎線茂林寺前駅から東方向に約1.6kmの場所に位置する、縄文時代と古墳時代の集落跡遺跡である。

遺跡が存する洪積台地は、利根川水系渡良瀬川の支流である一級河川谷田川の支谷である蛇沼に突出する小さな舌状台地を含む高台で、蛇沼の水面からは約7mほどの標高差がある。

遺跡の周辺には市立第四中学校があるほか、主に宅地としての開発が進行しているが、周辺には今も農地が多く残る。

本遺跡及びその周辺ではこれまで、昭和57年度、平成19.20.21.23.24年度の計6回の発掘調査が実施されており、縄文時代前期から中期と、古墳時代前期の集落跡から、多くの住居跡や遺物が見つかった。

縄文時代の住居跡は昭和57年度の調査で7軒、平成20年度の調査で4軒確認されている。うち、1軒が縄文前期のものであり、他の住居跡は縄文時代中期のものである。確認された縄文時代中期の土器からは関東地方をはじめ周辺諸地域の特徴を示す文様が見られ、この遺跡内に住んだ人びとが各地と交流を持っていたことがうかがえる。

今回調査が行われた地点は、平成21年度に実施された確認調査の際に遺物（縄文土器）の集中が見られた場所であり、縄文時代の住居跡の存在が推定されていた地点である。

(2) 調査の概要

間堀1遺跡（平26地点）の調査は、工事予定区域の範囲とその地形に合わせて調査区域が設定された。調査区域は平成21年度に行われた確認調査で遺物の集中が見られた箇所を含む。

調査区域はおおよそ南北17m・東西9mである。土比重機により表土を排除後、土層断面の観察を行いつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の検出を行った。

(3) 基本土層

本遺跡の基本土層は、第I層～第III層に分けられる。第I層は、耕作土層であった。

第II層は褐色土層である。一部に植物の根によると思われる攪乱が見られる。下部の第III層との漸位的な層であり、層の厚さは約20cmである。

第III層は、いわゆるローム層である。粘性・しまりともにややあり、水分が多い。黒または赤黒褐色を呈する。

(4) 検出された遺構

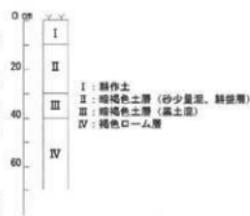
調査区内を人力で精査した結果、土坑28基、住居跡1軒を確認した。土坑の多くは本地点で過去に栽培されていた植物や樹木の痕跡と思われる。形状は不整形で遺物を伴わず、その壁面には細かい穴が見られた。大型の土坑も見られたが、内部からはビニール片が見られ、付近にはキヤピラと思われる痕跡が見られたことから、現代の重機による攪乱と判断した。

住居跡は調査区中央付近で確認された。形状は南北に最大径をもつ楕円形で、最大径は約4m、4層の埋土がレンズ状に堆積する。床面の一部は掘り込まれており、その中からは少量の焼土が見られた。しかしながら圓石は確認できず、炉と判断するには至らない。範囲内の遺物の状況や形状から、縄文時代の住居跡と推定される。

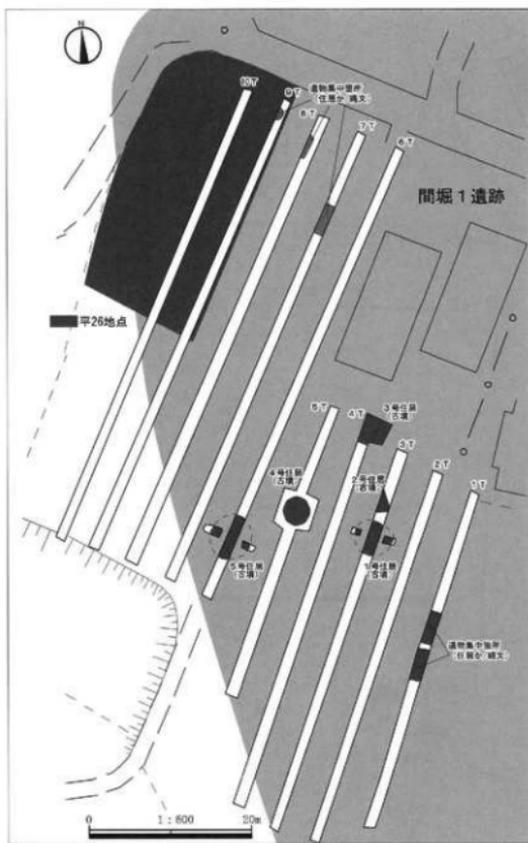
(5) 出土遺物

確認された遺物は縄文時代中期と見られる土器が主である。いずれも破片であり接合率は低く、完形やそれに近い状態のものはないが、これまでの調査で縄文時代中期の集落が確認されている本遺跡の傾向に合致する。その他、少量ながら石鏃が確認された。

特徴的な遺物としては、人為的な加工の痕跡を伴う石器片が挙げられる。へう状の形態を呈すものやすり鉢状を呈すもの、穴を穿とうとした痕跡があるものなど形状は様々であるが、いずれも詳細な性格は明らかではない。



第5図 基本土層図（1:20）



第6図 間堀1遺跡（平21地点）トレンチ配置図（1:600）

(6) まとめ

今回の調査は、平成21年度に行われた試掘確認調査の成果を基にして実施された。本地点はその際に確認された遺物集中箇所を含んでおり、関連する住居跡の確認を想定して調査を開始した。なお、本地点は間堀1遺跡のおおよそ南西端に位置する。

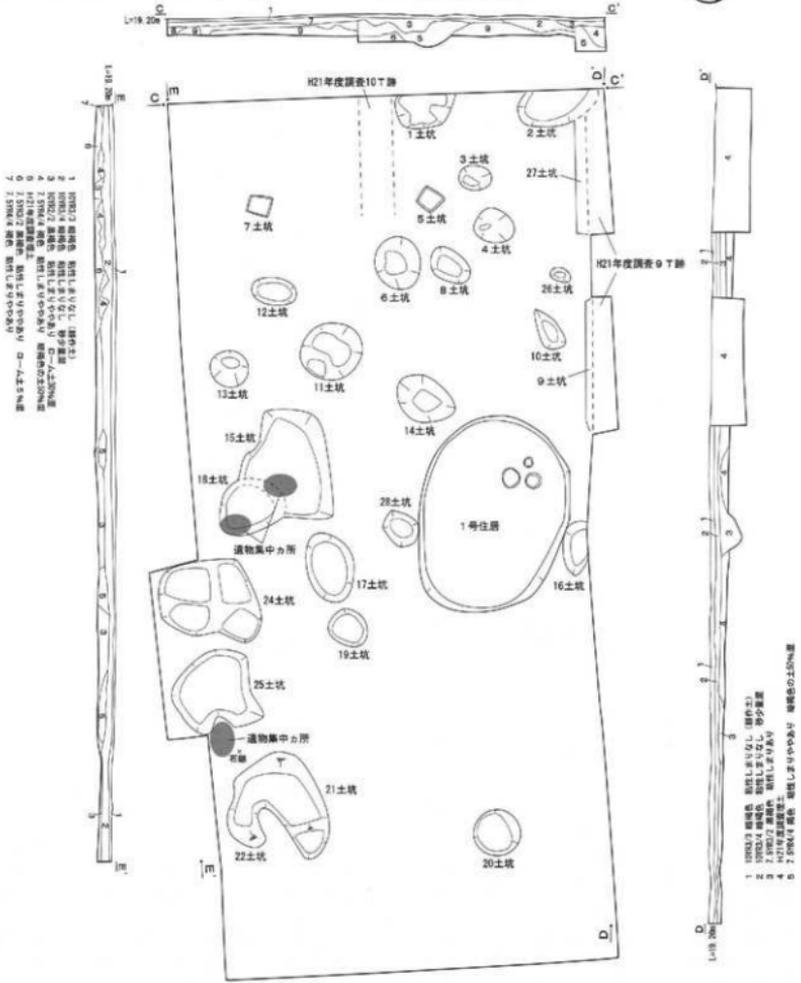
調査の結果、多くの土坑のほか、縄文時代の住居跡1軒が確認された。土坑のほとんどは植物や現代の擾乱によるものと見られ、それらから確認できた遺物の量は少なく、遺物を含まない土坑も多い。現地表面から約40cmほど掘り下げるとローム層に達することから、耕作による影響を強く受けたものと思われる。

間堀1遺跡ではこれまでに行われた発掘調査の成果から、縄文時代前期から中期と、古墳時代前期に集落が存していたことがわかっており、今回確認した住居跡は円形をした堅穴式住居であり、出土した遺物は縄文時代中期の特徴を持つ土器が多い。遺物の状況から、今回確認された住居跡は縄文時代中期のものとして推定され、当時この高台周辺で営まれていた集落の中の1軒と見られる。

本遺跡及びその周辺部では今後も新たな開発が予想される。地域内には農地として利用されている土地も多く、住居などの遺構が良好な状態で保存され、調査によって発見される可能性がある。本遺跡範囲内とその周辺においては、引き続き埋蔵文化財に関する適切な保護・調査を行う必要がある。



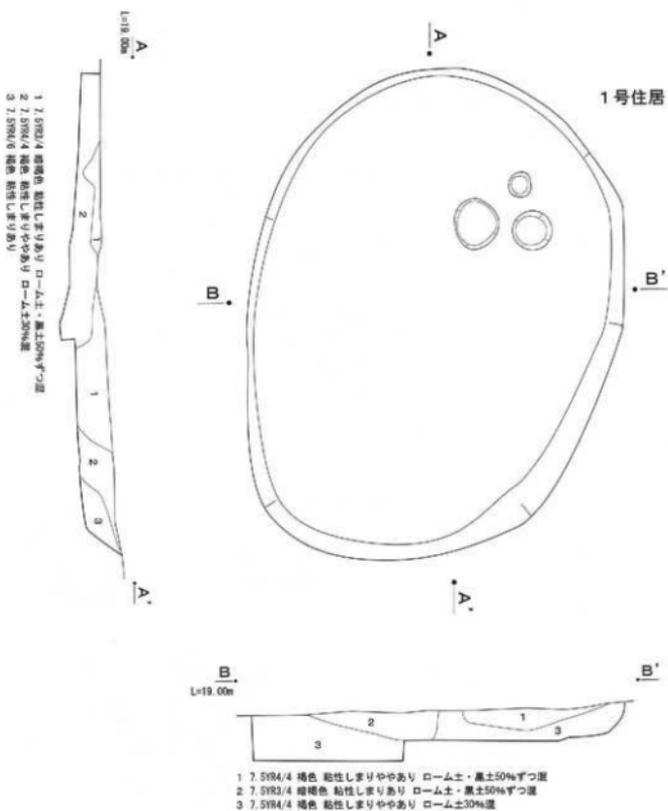
- 1 10YR3/3 暗褐色 粘性しまりなし (耕作土)
- 2 10YR2/2 濃褐色 粘性しまりややあり 0-1m土50%混
- 3 10YR2/4 暗褐色 粘性しまりなし、砂多量混
- 4 7.5YR3/2 黒褐色 粘性しまりややあり
- 5 H21年度調査結果土
- 6 7.5YR4/4 暗褐色 粘性しまりややあり 暗褐色の土10%混
- 7 10YR2/2 濃褐色 粘性しまりややあり 0-1m土30%混
- 8 7.5YR4/4 暗褐色 粘性しまりややあり



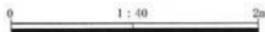
- 1 10YR3/3 暗褐色 粘性しまりなし (耕作土)
- 2 10YR2/2 濃褐色 粘性しまりややあり 0-1m土50%混
- 3 10YR2/4 暗褐色 粘性しまりなし、砂多量混
- 4 7.5YR3/2 黒褐色 粘性しまりややあり
- 5 H21年度調査結果土
- 6 7.5YR4/4 暗褐色 粘性しまりややあり 暗褐色の土10%混
- 7 10YR2/2 濃褐色 粘性しまりややあり 0-1m土30%混
- 8 7.5YR4/4 暗褐色 粘性しまりややあり

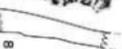
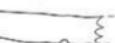
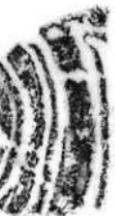
- 1 10YR3/3 暗褐色 粘性しまりなし (耕作土)
- 2 10YR2/2 濃褐色 粘性しまりややあり 0-1m土50%混
- 3 10YR2/4 暗褐色 粘性しまりなし、砂多量混
- 4 7.5YR3/2 黒褐色 粘性しまりややあり
- 5 H21年度調査結果土
- 6 7.5YR4/4 暗褐色 粘性しまりややあり 暗褐色の土10%混
- 7 10YR2/2 濃褐色 粘性しまりややあり 0-1m土30%混
- 8 7.5YR4/4 暗褐色 粘性しまりややあり

第7図 調査区平面図、断面図 (1:100)

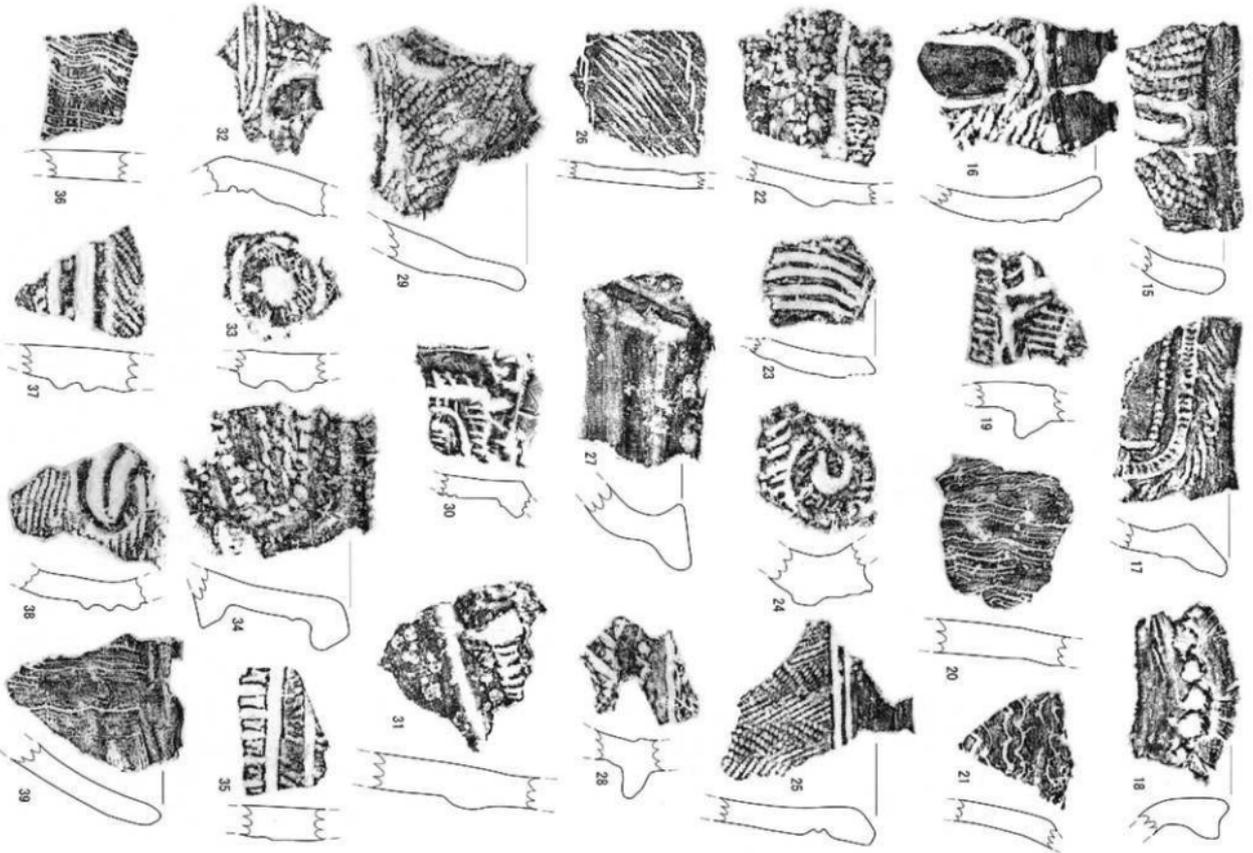


第8図 住居跡平面図、断面図 (1:40)





第9图 出土器物类型图①(1:2)



第10图 出土文物类图②(1:2)

第3章 試掘確認調査の概要

1. 館林城跡・城下町（平27地点）



第11図 館林城跡・城下町（平27地点）(1:2500)

所在地 館林市尾曳町216番97外12筆
調査原因 その他開発
調査期間 平成27年5月15日～6月5日
調査面積 約98㎡

(1) 遺跡と周辺の環境

「館林城跡・城下町」は、主に東武伊勢崎線館林駅東方に広がる、近世館林城を中心とした城館跡である。その遺跡範囲は現在の市街地中心部と重なっており、市内でも特に開発が進んでいる。城郭は失われており、一部に土塁などの遺構が残るのみである。

館林城は中世から近世にかけての城郭で、戦国時代に赤井氏により築かれた。その後、榎原家の入封により近世の城郭及び城下町の形成が進められ、榎原氏以降、幕末に至るまで7家の大名による藩政の中心地となった。

近世館林城の城郭中心部は邑楽・館林台地か

ら伏沼に突出する標高約20mの舌状台地の突端にあり、城下町はその西側の台地上に位置した。北の旧矢場川により形成された低地と、南の鶴生田川に挟まれている。

(2) 調査の概要

館林城跡・城下町（平27地点）の確認調査は、工事予定区域の地形に合わせ、南北方向に2本のトレンチを設定し、土木重機により表土を排除した。その後はトレンチ内部および土層断面の観察を行ないつつ、人力で掘り下げ、遺構・遺物の検出を行った。現地表面からローム層までの深度は約40cm～70cmであった。土中は水分が多い傾向にあり、土色は黒色を呈す。調査区内で明確なローム層を確認することはできなかった。トレンチ北側ほど土中の水分が増し、南に至ると砂質の土が増して水分が減るが、この傾向は両トレンチで共通する。

(3) 基本土層

本遺跡の基本土層は、第I層～第III層に分けられる。I層は表土であり、耕作土のほか、炭や廃棄物なども確認された。II層は耕作に伴う耕盤層であった。5cmに満たない薄い層であるが、調査地点のほぼ全面に広がっている。非常に硬いがしまりはなく、遺物も伴わない。III層は暗褐色を呈し、粘性・しまりともにある。調査地区の北側ほど厚い。また、調査区北側に至るほど水分の含有量が多い傾向にある。ほぼ全面で遺物を伴う。

(4) 検出した遺構

複数の土坑や溝が確認されているが、現代のかく乱や木根によるものが多い。2Tでは東西に走る溝の中から多くの竹の根が見られ、この地点に過去、東西方向に竹が植えられていた様子を確認できる。

(5) 出土した遺物

確認できた遺物の年代は縄文から現代まで幅広いものがあったが、特に注目されるのは中世期と見られるカワラケと、中世から近世が主と見られる陶磁器片である。

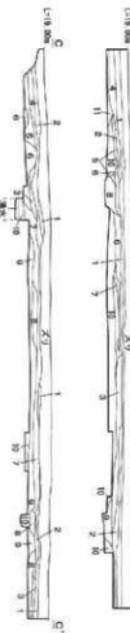
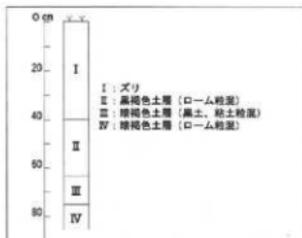
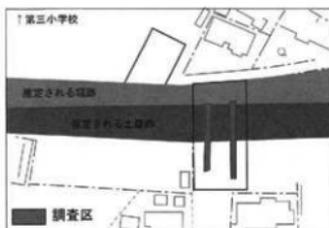
カワラケは2T中ほどの東側壁付近の、土塁底部約1m四方のごく狭い範囲に集中して確認された。大まかに分類するならば、中型（径約11～12cm）のものが12点、小型（径約7～7.5cm）のものが9点の計21点である。形態から中世末期、本市においては榎原氏入封以前のもと思われる。小型のカワラケは一部に小さな欠損が見られるものの、ほぼ完形の状態を保つものがほとんどであった。用途は明らかでないが、祭祀・儀式に伴うものの可能性がある。確認された場所が土塁底部と推定される位置であることから、これらのカワラケは土塁の築造年代を直接示す資料ともいえる。

陶磁器類は両トレンチの広い範囲で確認されているが、小規模な破片が主であった。産地は瀬戸・美濃・肥前など多岐に渡る。また、中世の貿易陶磁器として中国産龍泉窯系青磁片が1点見られた。いずれもトレンチ内の覆土からの確認であり、土塁との直接的な関係は明確でない。

(6) まとめ

今回の調査では、2トレンチの東西両壁の一部で土塁の様子を観察することができた。その幅は南北約4mで、2ないし3の土層で構築されている。土塁上部は掘削と思われる影響を受け、消失している。遺物の集中も見られたが範囲はごく限定的であり、その他に保存の対象となる遺構等は確認されなかった。

今回の調査により既に土中がかく乱の影響を受けている様子を確認できた。保存を要する遺構は確認できなかったことから、開発行為による埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



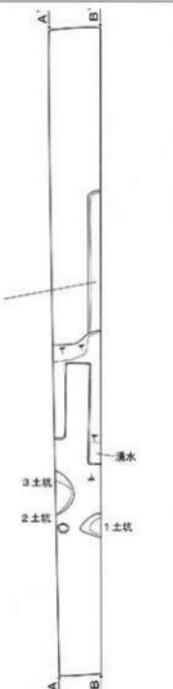
A-A'

- 1 10R3/2 黒褐色 粘性しまり中あり 酸化土10%道
- 2 10R3/2 暗褐色 粘性しまり強い ローム粒40%、酸化土10%道
- 3 7.0R2/2 黒褐色 粘性しまりややあり ローム粒30%、酸化土5%道
- 4 10R3/2 黒褐色 粘性しまり強い
- 5 10R3/2 暗褐色 粘性しまり強い ローム粒40%、酸化土10%道
- 6 10R3/2 暗褐色 粘性しまりあり 粘土ブロック1%、酸化土5%道
- 7 10R2/2 暗褐色 粘性しまり強い ローム粒10%、酸化土10%道
- 8 10R2/2 暗褐色 粘性しまりあり ローム粒10%、酸化土20%道



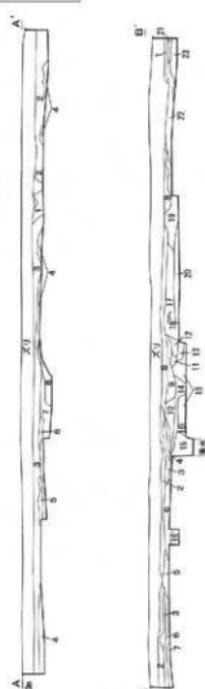
B-B'

- 1 10R2/2 黒褐色 粘性しまり中あり ローム粒50%、酸化土2%道
- 2 10R2/2 黒褐色 粘性しまり強い、ズリ5%道
- 3 10R2/2 黒褐色 粘性しまり強い、ローム粒5%、酸化土2%道
- 4 10R2/2 黒褐色 粘性しまり中あり 酸化土10%道
- 5 10R2/2 黒褐色 粘性しまり中あり 砂5%、ローム粒-酸化土3%道
- 6 10R2/2 黒褐色 粘性しまり中あり 砂10%道
- 7 10R2/2 黒褐色 粘性しまり強い 酸化土5%道
- 8 10R2/2 暗褐色 粘性しまりあり 粘土塊1%、酸化土5%道
- 9 10R2/2 暗褐色 粘性しまりあり
- 10 7.0R2/2 暗褐色 粘性しまり強い (砂)道
- 11 10R2/2 暗褐色 粘性しまり強い ローム粒20%道
- 12 10R2/2 黒褐色 粘性しまり強い ローム粒2%道
- 13 10R2/2 黒褐色 粘性しまり強い ローム粒1%道
- 14 10R2/2 黒褐色 粘性しまり強い ローム粒-
- 15 10R2/2 黒褐色 粘性しまり強い ローム粒2%道
- 16 10R2/2 暗褐色 粘性しまり強い
- 17 10R2/2 暗褐色 粘性しまり強い (粘土)道
- 18 10R2/2 暗褐色 粘性しまり強い
- 19 10R2/2 暗褐色 粘性しまり強い 酸化土6%道
- 20 10R2/2 暗褐色 粘性しまり強い ロームブロック1%、酸化土2%道
- 21 10R3/2 暗褐色 粘性しまりあり ローム粒10%、酸化土2%道
- 22 10R2/2 暗褐色 粘性しまりあり ローム粒2%、粘土塊1%道
- 23 10R2/2 暗褐色 粘性しまりあり ローム粒6%、粘土塊5%道



C-C'

- 1 7.0R2/2 黒褐色 粘性しまり無し、ズリ道
- 2 10R2/2 黒褐色 粘性しまり中あり ローム粒20%道
- 3 10R2/2 暗褐色 粘性しまり強い ローム粒40%、酸化土10%道
- 4 10R2/2 暗褐色 粘性しまり強い ローム粒20%、酸化土10%道
- 5 10R2/2 暗褐色 粘性しまり強い ローム粒10%、酸化土10%道
- 6 10R2/2 暗褐色 粘性しまり強い ローム粒10%、酸化土10%道
- 7 7.0R2/2 黒褐色 粘性しまり中あり ローム粒20%、酸化土5%道
- 8 10R2/2 暗褐色 粘性しまり中あり
- 9 10R2/2 暗褐色 粘性しまり中あり 粘土ブロック1%、酸化土5%道
- 10 10R2/2 黒褐色 粘性しまり強い 酸化土10%道

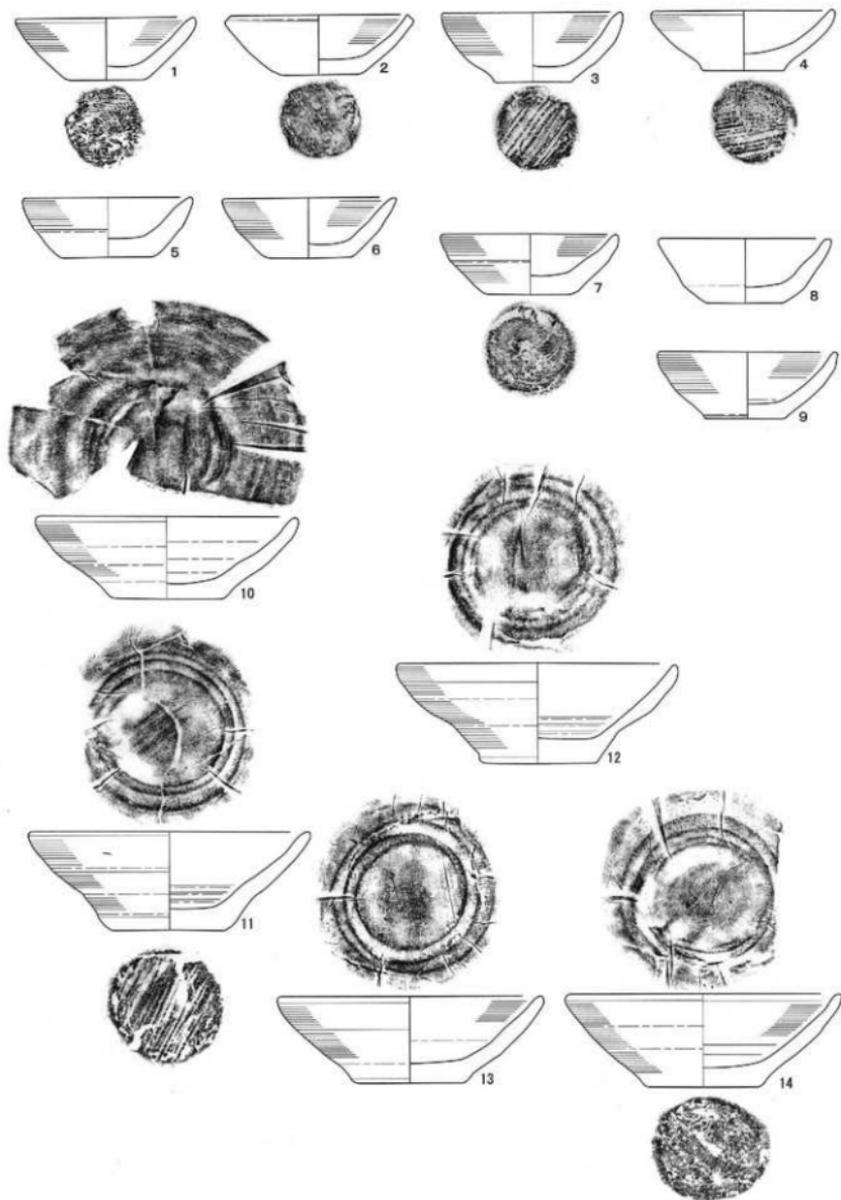


D-D'

- 1 7.0R2/2 黒褐色 粘性しまり無し、ズリ道
- 2 10R2/2 暗褐色 粘性しまり中あり
- 3 10R2/2 暗褐色 粘性しまり中あり ローム粒20%道
- 4 7.0R2/2 暗褐色 粘性しまり中あり ローム粒20%、酸化土5%道
- 5 10R2/2 暗褐色 粘性しまり強い ローム粒40%、酸化土10%道
- 6 10R2/2 黒褐色 粘性しまり強い
- 7 10R2/2 暗褐色 粘性しまり強い 粘土ブロック1%、酸化土5%道
- 8 10R2/2 暗褐色 粘性しまり強い 酸化土5%道
- 9 10R2/2 暗褐色 粘性しまり強い 酸化土20%道
- 10 10R2/2 暗褐色 粘性しまり強い ローム粒10%、酸化土10%道
- 11 10R2/2 暗褐色 粘性しまり強い

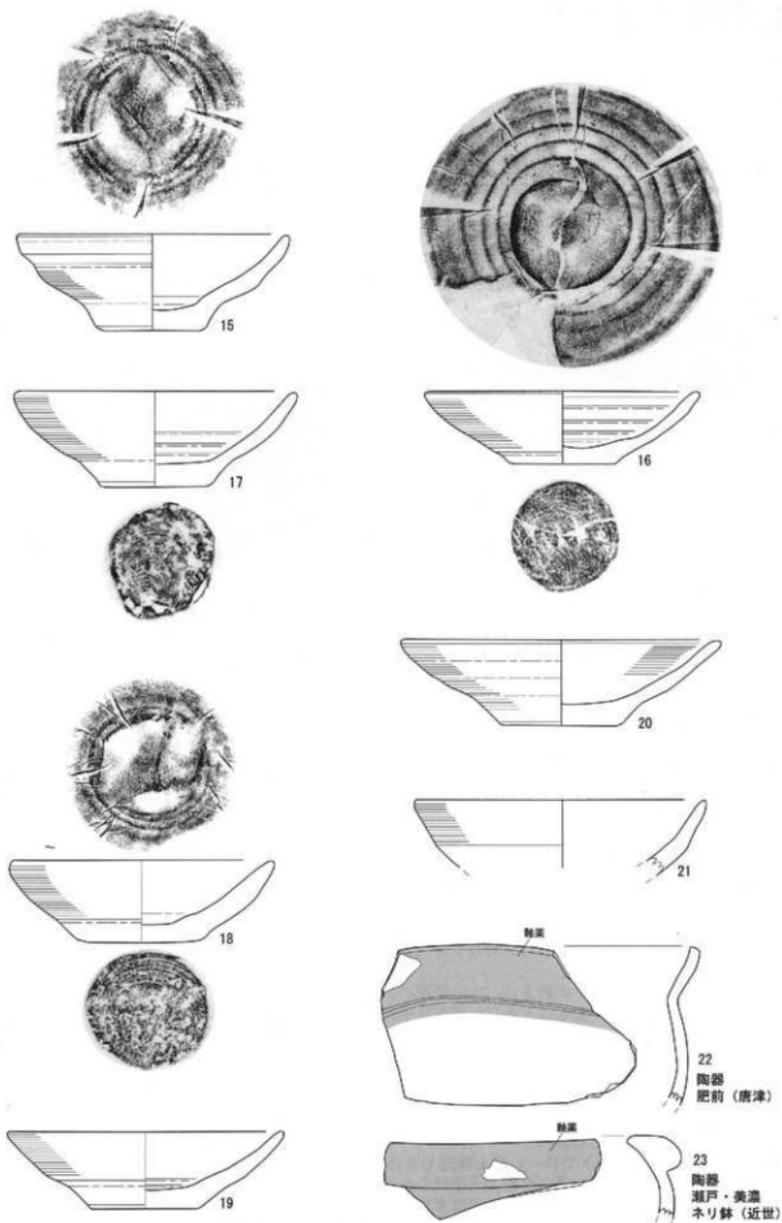


第12図 トレンチ配置図、平面図、断面図 (1:200)、基本土層図 (1:20)



第13圖 出土遺物実測圖① (1:2)

0 1:2 5cm



第14図 出土遺物実測図② (1:2)

2. 子ノ神1遺跡(平成27地点)



第15図 子ノ神1遺跡(平27地点)(1:3500)

所在地 館林市羽附町字上志柄1644番1外82筆

調査原因 宅地造成

調査期間 平成27年7月31日～11月25日

調査面積 約2,669㎡

(1) 遺跡と周辺の環境

子ノ神1遺跡は市街地中心部の南東方向、東武伊勢崎線館林駅から約2.6kmの場所に位置する。遺跡範囲の北側に沿うように国道354号線が東西に走る。周辺は店舗や住宅の開発が進んでいるが、現在でも畑作を中心とした農地が広く残る地域である。本遺跡は、近隣を流れる一級河川谷田川から北西に延びる細い谷に面する洪積台地上に広がっている。遺跡範囲全体の標高は約20mである。

本遺跡範囲内では、平成18年度(平18地点)に大型店舗建設、平成19年度(平19地点)に個人住宅建設に伴う試掘確認調査が行われている。平18地点では土坑2基、平19地点では土坑9基が確認されたが、いずれもその年代は不明であった。遺物としては平18地点で土師器片、平19地点で縄文土器片および土師器片、陶磁器片が出土したが、少量であるため明確な時代判定はできなかった。

(2) 調査の概要

子ノ神1遺跡(平27地点)の調査は、広い範囲におよぶ宅地造成計画を契機として実施された。

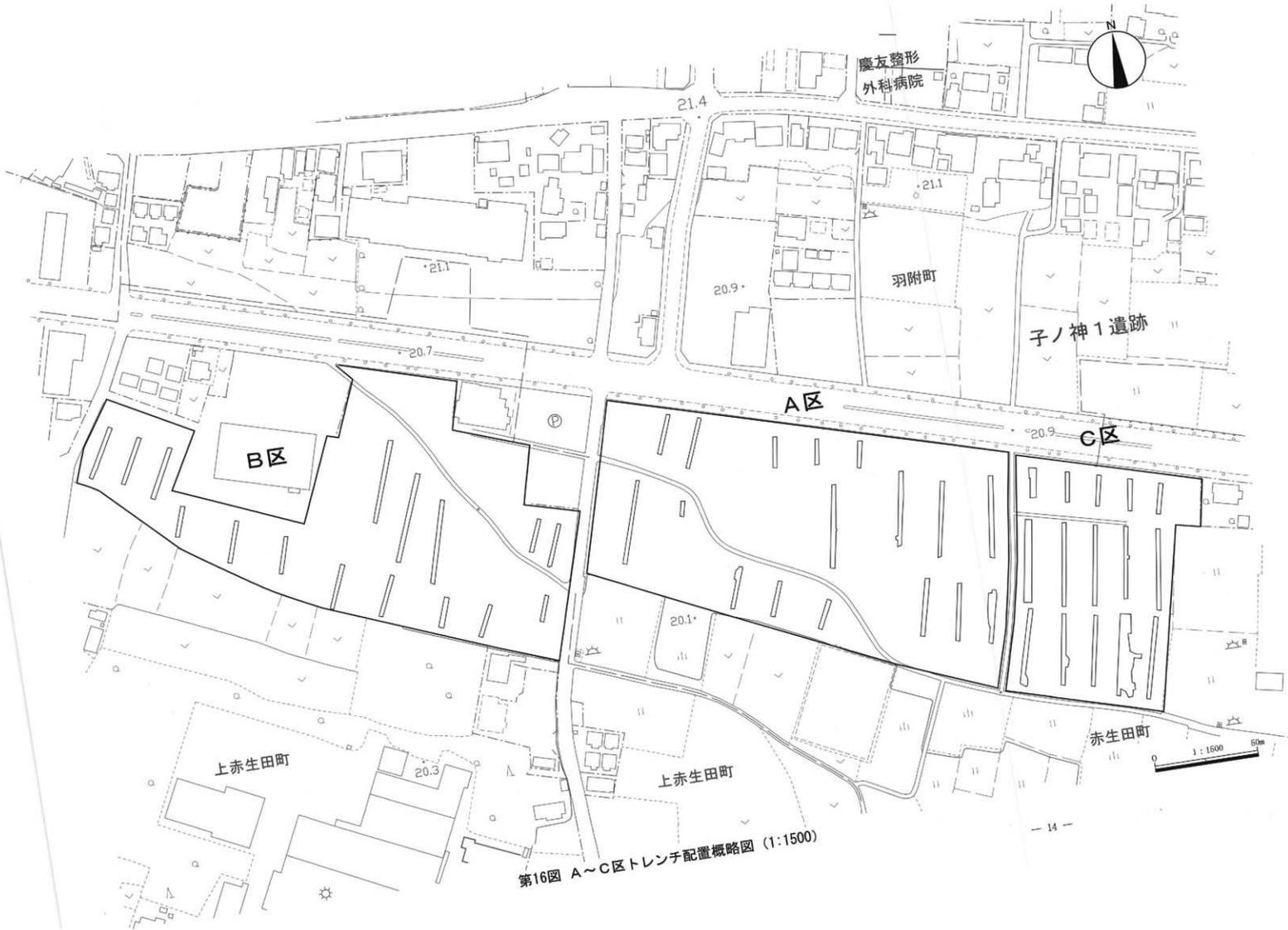
開発予定区域が広範囲であることから、調査は平27地点を3区(A区・B区・C区)に分け、順次実施した。各調査区の現況を考慮し、実際の調査はA区→C区→B区の順番で行った。

トレンチは各調査区内の地形に合わせ、いずれも南北方向に、A区17本、B区16本、C区15本、計48本が設定された。土比重機によって表土を排除し、その後はトレンチ内部および土層断面の観察を行ない、土層を掘り下げ、遺構・遺物の検出を行った。

(3) 基本土層

本地点は広範囲であるため各調査区や調査区内のトレンチによって差異が見られるが、おおよそ表土である耕作土から約10～30cm下でローム層を確認できる場所が多い。この傾向は平18・19地点と類似する。表土からローム層確認面までが浅いため、土中はこれまでの耕作による影響を強く受けている。

なお、B区南側に設置されたトレンチ内は本地点内でも特に含水率が高い。黒色土が堆積してローム層が確認できず、北から南へ向けて土地が傾斜する様子を観察することができる。



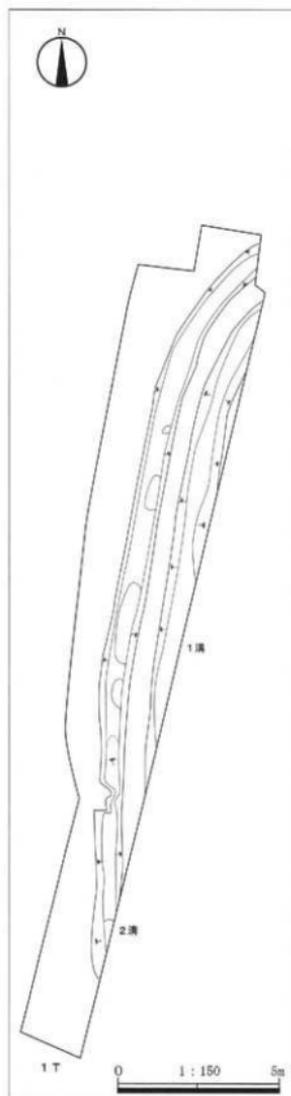
第16図 A~C区トレンチ配置概略図 (1:1500)

【A区】

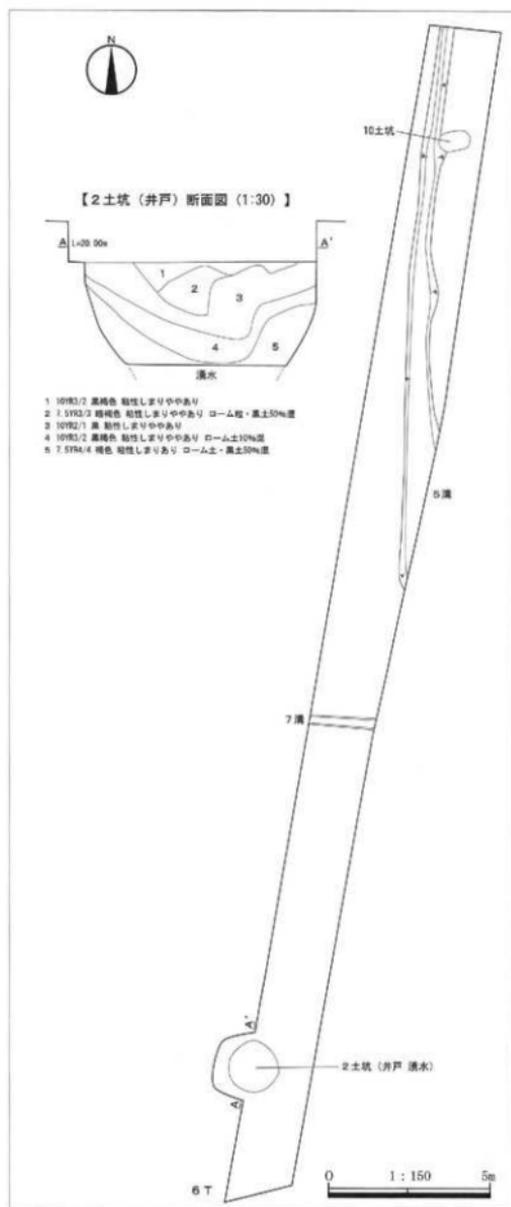


第17図 A区トレンチ配置図 (1:800)

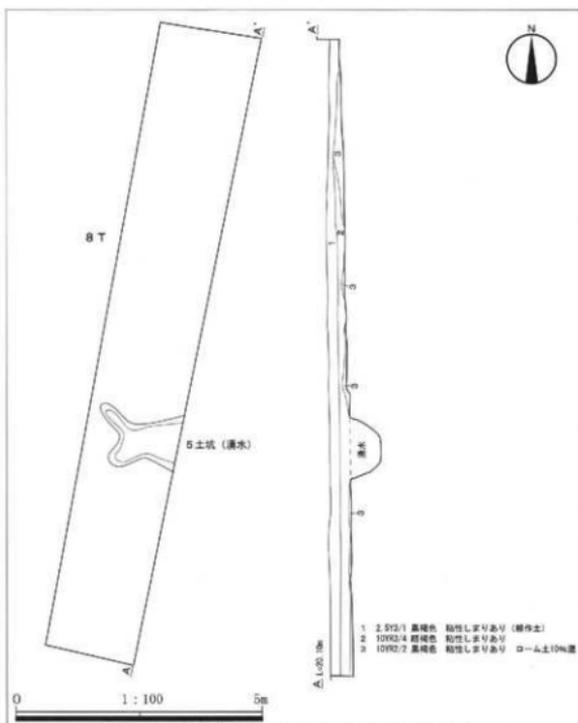




第18図 A区1トレンチ平面図(1:150)



第19図 A区6トレンチ平面図(1:150)、2土坑断面図



第20図 A区8トレンチ平面図、断面図 (1:100)

(1) 検出した遺構

調査区全体で土坑が点在するが、現代の耕作の影響と推定されるものが多い。井戸2基が確認できたが、その性格は明らかでない。

特徴的な遺構として、1 T内で確認された、西側に弧を描きながら南北方向に走る2条の溝 (1・2溝) が挙げられる。これらは内部構造に共通点が見られ、ともに幅は約90~100cm、深さは約80cmである。互いの間隔は約50cmと接近している。形状は逆台形状で、壁面はきつく立ち上がる。壁面と底部床面は締まっており、特に床面の締まりは強い。覆土からは近世の陶磁器片を多く確認することができ、近世期にこの溝が開口していたことを示すものと思われる。この2条の溝の埋め戻しには、砂質を多く含み、締まりがなくやや黒色を呈す土が用いられている。同様の土は調査区内では他に確認できず、外部から持ち込まれたものと考えられる。溝の弧の内側に住居跡や居館跡の発見も想定されたが、その痕跡はない。現時点で本溝は、耕作に伴う近世期の用水路の一部と考えられる。

(2) 出土した遺物

全体的に近世期の陶磁器片が散布する。広範囲で現代の耕作の影響を強く受けているため出土地点・深さは一定でないが、1 T内の1・2溝内からは比較的確認できた数が多い。その他には縄文土器片が見られた。

陶磁器片は破片が主であり全体の確認ができるものは少ない。少数ながら、表面に釉薬を用いた様子が見られ、焼成良好な個体も見られた。

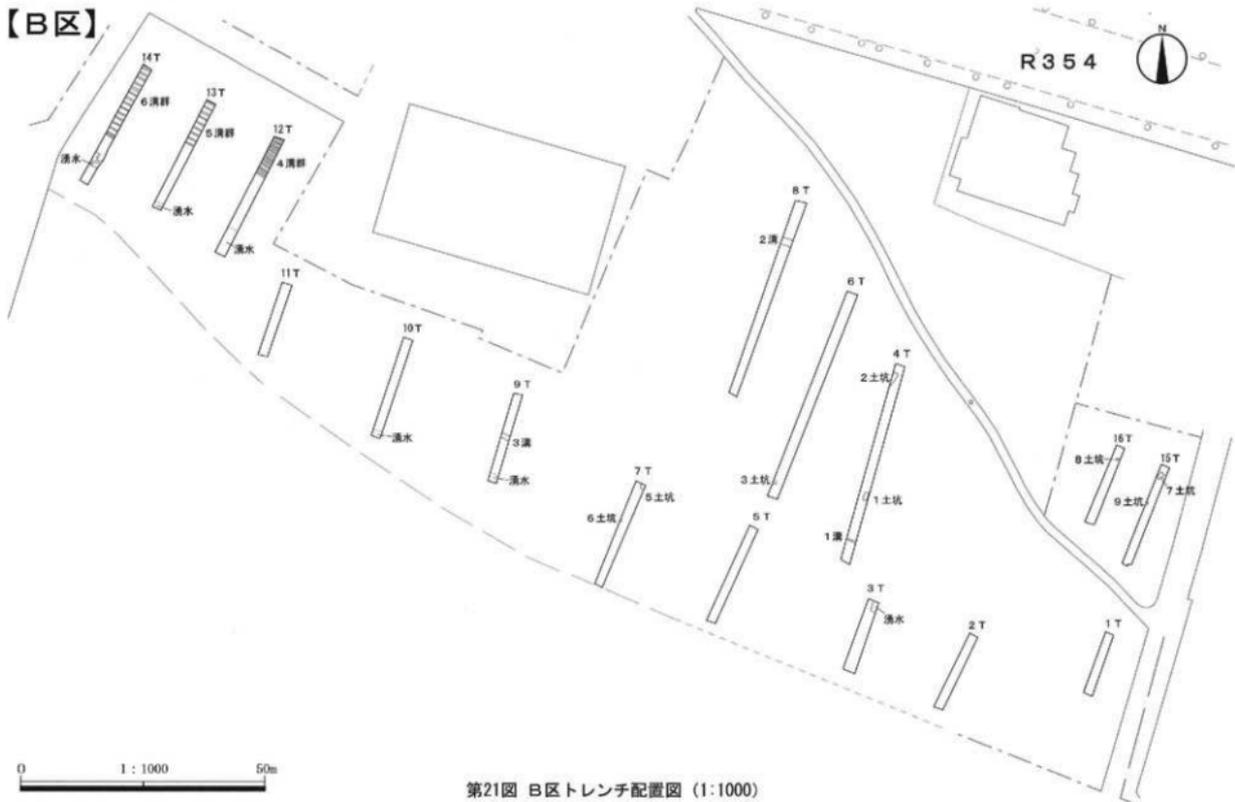
(3) まとめ

A区全体の傾向として、表土である耕作土が10~20cm堆積し、その直下でローム層が確認できる。これは、耕作等によって従前の表土が削り取られ、かく乱を強く受けた結果と思われる。また、北から南に向かってやや傾斜が見られ、A区の南に至るほど表土からローム面までの距離が深くなる。現在の地表面は緩やかな傾斜が見られる程度であるが、従前のA区内には今以上の起伏があったことが推定される。

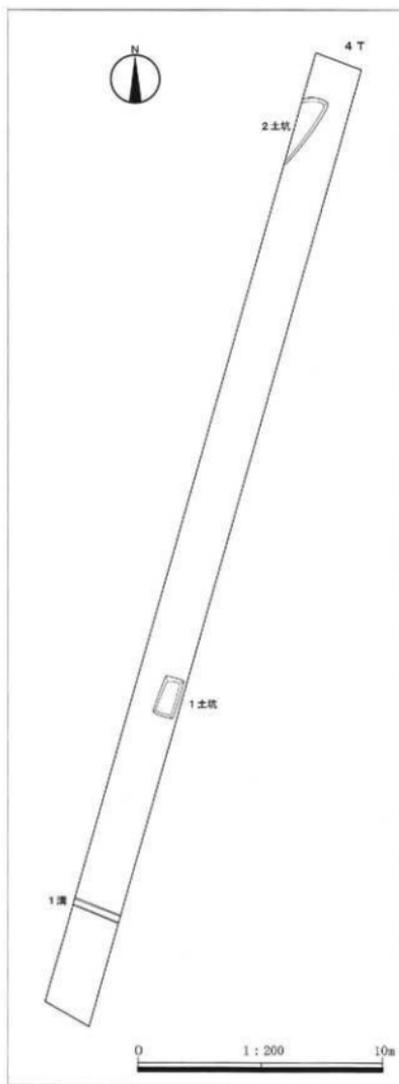
1 T内の1・2溝のように近世期と思われる溝も見られたが、調査区内では廃棄物が確認されるなどかく乱の激しい箇所も多く、保存を要する埋蔵文化財は見られなかったため、開発に支障はないものと判断した。

【B区】

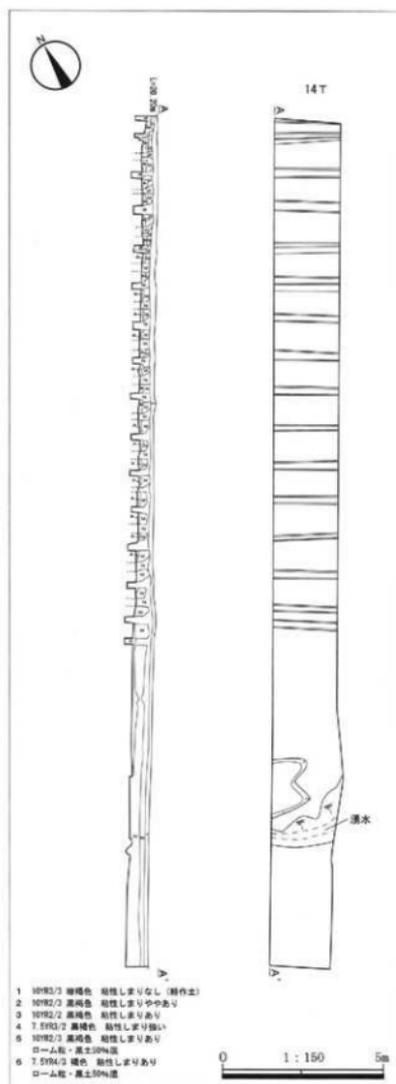
R354



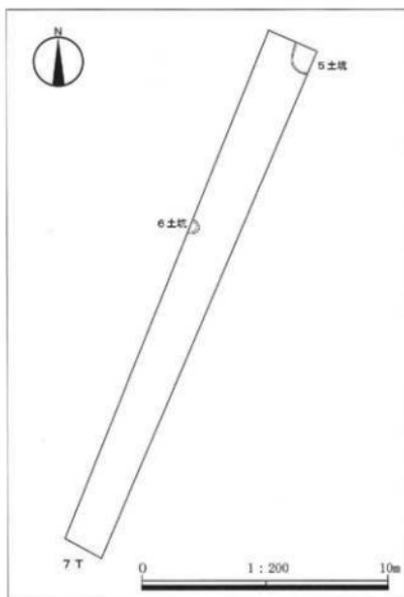
第21図 B区トレンチ配置図 (1:1000)



第22図 B区4トレンチ平面図 (1:200)



- 1 101R3/3 赤褐色 粘性しまりなし (耕作土)
- 2 101R2/3 黒褐色 粘性しまり中あり
- 3 101R2/2 黒褐色 粘性しまりあり
- 4 7.51R3/2 黒褐色 粘性しまり強い
- 5 101R2/3 黒褐色 粘性しまりあり
- 6 7.51R4/2 褐色 粘性しまりあり
ローム瓦・黒土50%混



第24図 B区7トレンチ平面図 (1:200)

【B区】

(1) 検出した遺構

全体的に土坑や溝が点在して確認できるが、遺物を伴うものは少ない。多くはごく最近の耕作の影響によるものと見られる。調査区内では用排水用のパイプが地下に布設されていた様子を見ることができた。

B区西側の12・13・14T内では、東西方向に走り、3本のトレンチを横断する溝群が見られた。溝の幅は概ね30～40cm、深さは確認面より30～40cm、溝同士の間隔は約30cmである。底部はしまりが強く、その中央部はやや盛り上がり、壁は垂直に近い。これらの特徴は大部分の溝でほぼ共通する。溝群から確認できた遺物は少量である。従前の利用形態から、耕作の痕であると思われる。

(2) 出土した遺物

遺物はB区全体に散布する。特徴として、A・C区では遺物全体に占める陶磁器片など近世遺物の割合が多いことに対して、B区でも近世遺物は見られるものの、縄文土器片の割合がそれに比して多いことが挙げられる。遺物集中箇所は見られない。

B区内で確認された縄文土器片は胎土に雲母を含み、灰あるいは黒色を呈するものが多い。それらの器種・性格は明らかでない。遺物は地区全体のトレンチ内に散布するが、これは前述のとおり耕作の影響を強く受けた結果と思われる、保存すべき遺構を見ることはできない。

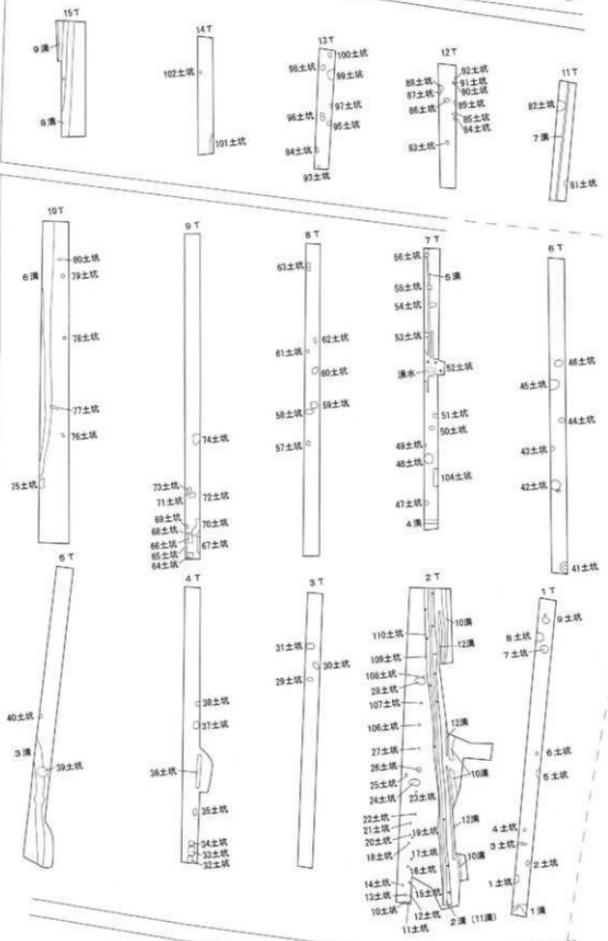
(3) まとめ

本調査区の地形は北から南へやや傾斜する。A・C区と同様に、土中は耕作による強い影響を受けている。調査区内では、現地表面である耕作土を排除するとその直下でローム面を確認できる地点が多い。調査区北側の8トレンチでは、表土の直下10cmほどの位置でローム層が確認できるなど、特にその傾向が顕著である。一方で、調査区南側に至るほど表土からローム層までが深くなる。それらの地点では表土下に黒色土の堆積が見られ、併せて土中の水分が増す。ローム層は確認できず、掘削を続けると湧水に至る。この傾向は特に3・5・7トレンチで顕著に見られる。

遺構は調査区全体に散在しているが、現代の耕作によって形成されたかと推定されるものが多い。また、遺物も調査区全体で散布して見られるが、特定の集中箇所はない。これらのことから、本地区においては保護すべき埋藏文化財はなく、開発によって遺跡の保存に重大な支障はないものと判断した。

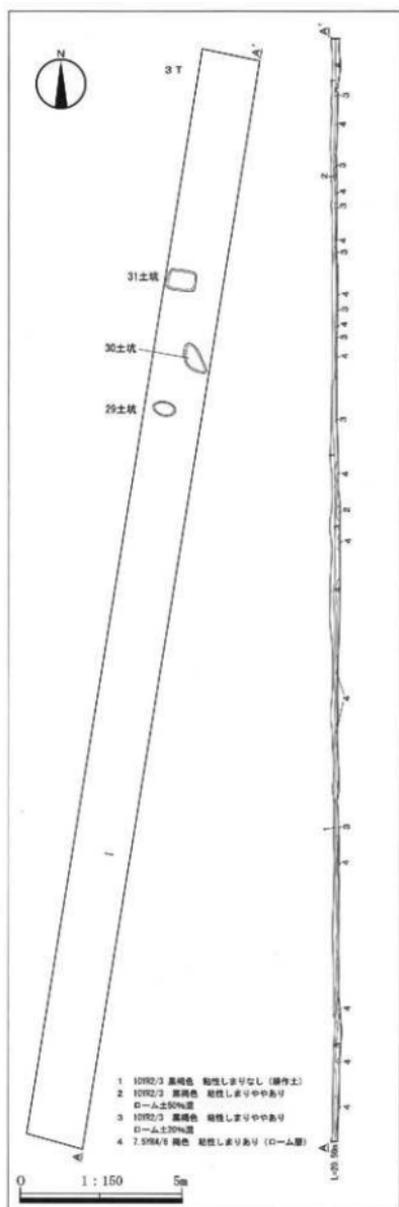
R354

【C区】

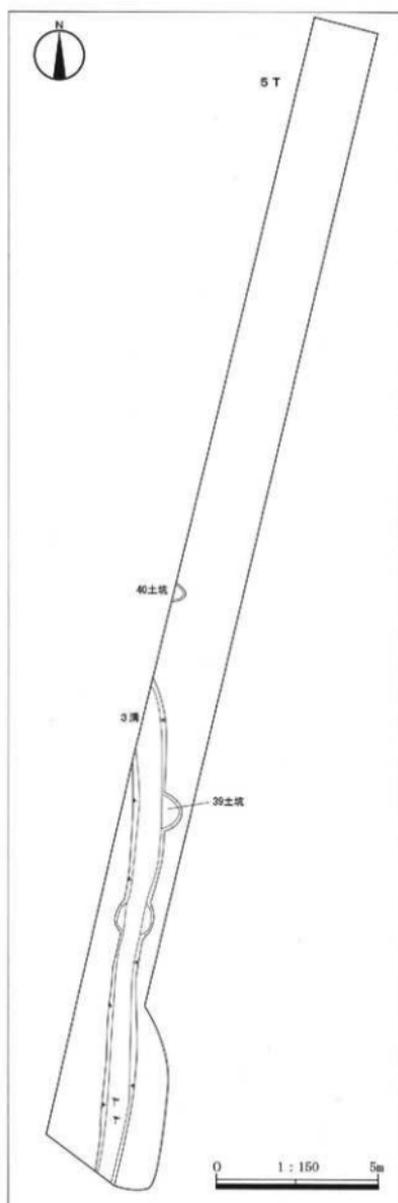


第25図-C区トレンチ配置図 (1:500)

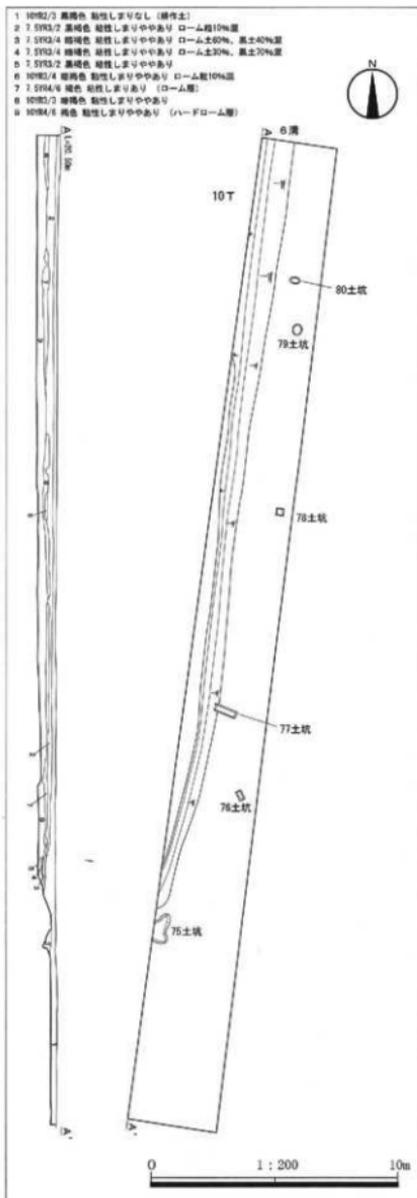




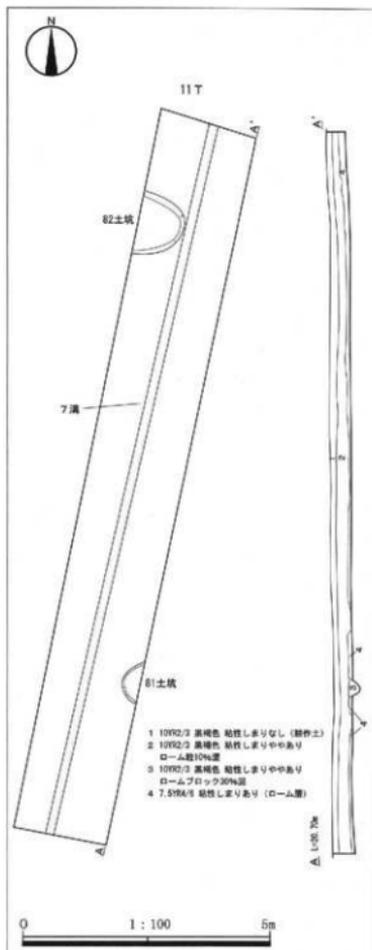
第26図 C区3トレンチ平面図、断面図 (1:150)



第27図 C区5トレンチ平面図 (1:150)



第28図 C区10トレンチ平面図、断面図 (1:200)



第29図 C区11トレンチ平面図、断面図 (1:100)

- 1 10Y2/3 黄褐色 粘性しまりなし (耕作土)
 2 10Y2/2 黄褐色 粘性しまり中やあり
 ローム粒10%混
 3 10YR2/3 黄褐色 粘性しまり中やあり
 ロームブロック30%混
 4 7.5YR4/6 褐色 粘性しまりあり (ローム層)

【C区】

(1) 検出した遺構

調査区全体で数多くの土坑や溝が見られたが、これらは現代の耕作に伴って生じたものが大半と思われる。

本調査区内の土坑の数は全体で100を超えるが、そのほとんどが小規模かつ遺物を伴わない。農業用ビニールハウスの柱と思われる柱列など、耕作の影響が強く見られる。

本調査区内で確認された溝の多くが南北方向に伸びるものであった。これは南から北へ傾斜する地形的な特徴によるものと考えられる。

特徴的な遺構として、調査区西側で確認された溝が挙げられる。これは5・10・15Tを南北に縦断し、調査区外へさらに延長している。溝の幅は確認面で70～80cm・床面で約20cmであり、上部から底面に向けて径が窄まる形状をし、壁面の傾斜はきつい。確認面から床面までの深さは約70～80cmであり、これは3本のトレンチ内の溝で概ね共通している。壁面・床面ともに強く締まっており、床面の土色はやや強い黒色を呈す。埋土には砂質の多い土が用いられ、溝内部からは近世の陶磁器片が多く見られる。

これらの構造や埋土の状況、内包している遺物の様子はA区東端の1T内で確認された溝と類似している。位置的な条件からも、このC区5・10・15T内で確認された溝は、A区1T内で確認された溝の延長と推定される。

この溝の周囲では住居跡などの遺構は見つかっておらず、遺物・構造などからもその用途は明確ではない。周辺の土地利用の状況から、耕作に伴う排水路である可能性を考慮することができる。

なお、本溝の西側には、今回確認した溝に並走するように走る別の溝1条が見られたが、その大半が調査区外、現況は道路となっている場所の下であるため、今回はその一部を確認するに留まった。

(2) 出土した遺物

本調査区では全体的に遺物の散布が見られ、確認できた遺物の量は本地点の3区の中で最も多い。縄文土器片も見られたが、多いのはA区と同様に陶磁器片である。特定の遺物集中箇所は確認できていない。

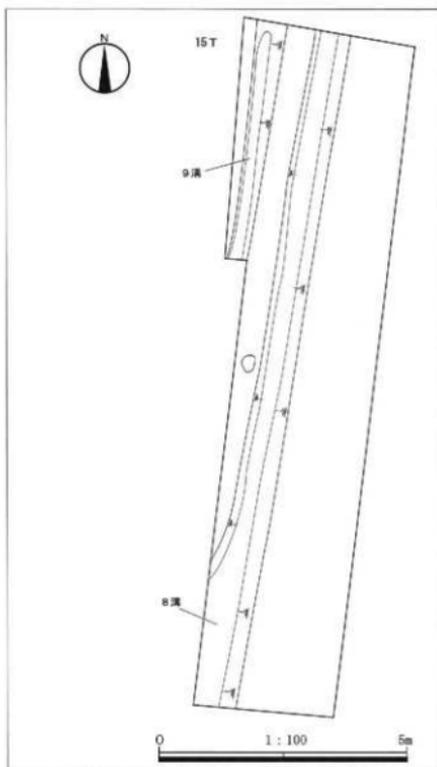
前述した5・10・15T内の溝の埋土の中からは陶磁器片が多く確認できた。確認された遺物にはすり鉢片を含む。もとの器種を特定できるものは少ないが、表面の状態から天目茶碗の一部と見られる破片があった。底部周辺で見られ、表面には釉薬が施されている。濃い黒色と薄茶色を呈す。この他には底面に糸切り痕などロクロ成型の特徴を示す個体がある。

特徴的な縄文遺物としては、15T内部の8溝から発見された石鉄1点が挙げられる。周囲に同時代の遺物の集中はなく、溝内部に水の流れがあった際に、その作用で他の地点より運ばれてきたものと推定される。

(3) まとめ

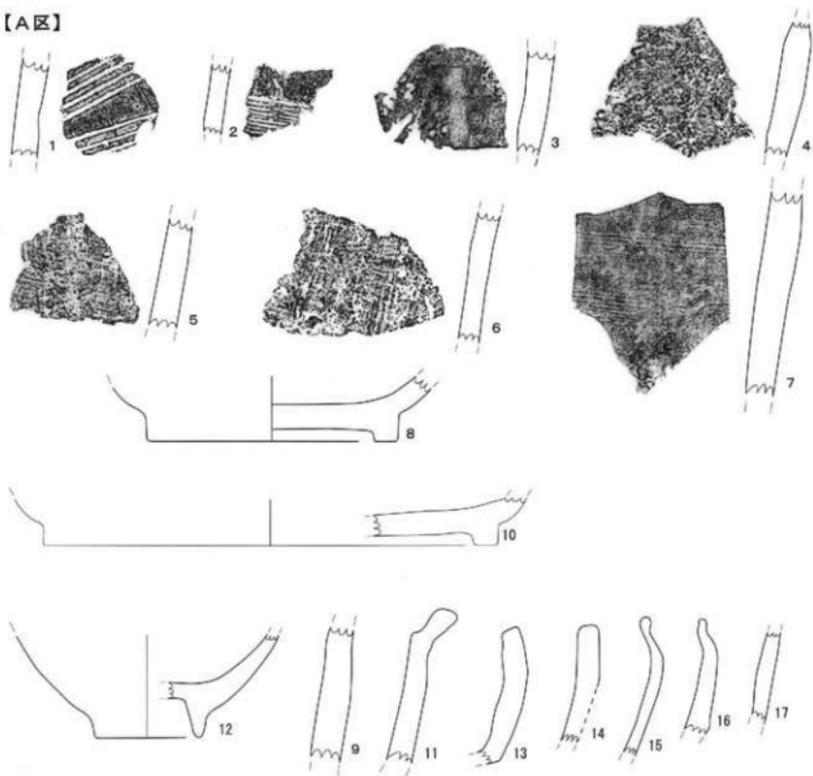
A区・B区と同様、土中では耕作の影響を強く受けている。表土は耕作土であり、その直下でローム層を確認できる傾向は全体に共通してみられる。ローム層を確認できる高さは地区内のトレンチごとにやや差異がある。これは、従前の地形が現況以上に起伏をもっていたことを示すものと思われる。

本調査区においては5・10・15T内を縦断する溝をはじめとして、数多くの土坑や溝が確認された。しかしながらその多くは近現代の耕作によって形成されたものであり、埋蔵文化財として記録・保存が必要な遺構を発見するには至らなかった。そのため、今回の開発に関して埋蔵文化財の保存について重大な支障はないものと判断をした。

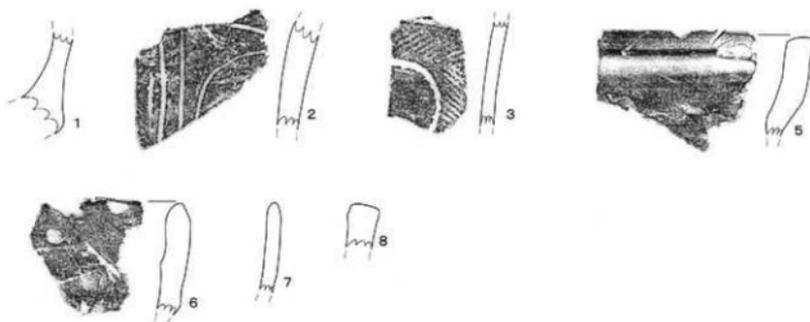


第30図 C区15Tトレンチ平面図 (1:100)

【A区】



【B区】



(No4欠番)

第31回 出土遺物実測図① (1:2)

0 1:2 5cm

写真図版

間堀1遺跡（平26地点）



1_1 土木重機による掘削



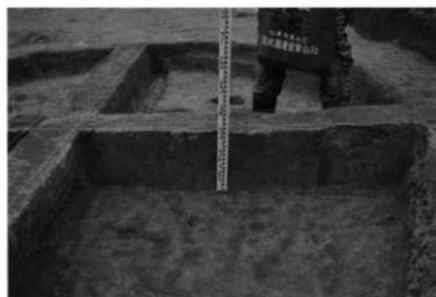
1_2 調査区全景（北から）



1_3 15,18土坑遺物出土状況（西から）



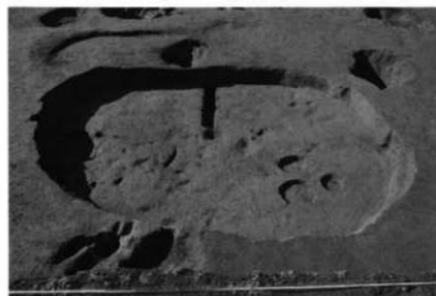
1_4 1号住居調査途中（南から）



1_5 1号住居内北側ベルト断面（南から）



1_6 1号住居内東側ベルト断面（西から）



1_7 1号住居完掘（東から）



1_8 1号住居完掘（西から）



2_1 1号住居完掘(北から)



2_2 調査区内西壁断面(東から)



2_3 調査区内北壁断面(南から)



2_4 調査区完掘全景(南から)

館林城跡・城下町(平27地点)



2_5 土木重機による掘削



2_6 1T断面(西から)



2_7 2T断面(東から)①



2_8 2T断面(東から)②



3_1 1T (南から)



3_2 2T (南から)



3_3 2T (北から)



3_4 2T内遺物集中箇所 (西から) ①



3_5 2T内遺物集中箇所 (西から) ②



3_6 2T内遺物集中箇所取り上げ後 (西から)



3_7 2T内遺物集中箇所取り上げ後 (南西から)



4_1 2T断面 (構造物跡か 東から)



4_2 2T断面 (構造物跡か 北東から)

子ノ神1遺跡 (平27地点)



4_3 調査地全景

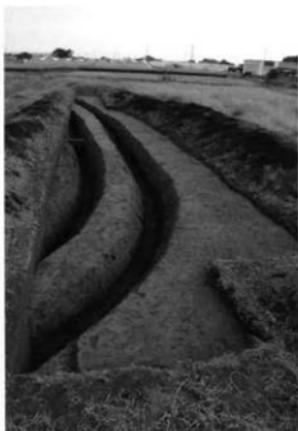


4_4 土木重機による掘削

【A区】



4_5 1T (南から)



4_6 1T (北から)



4_7 1T内1溝 (北から)



5_1 1 T内2溝 (北から)



5_2 6 T (南から)



5_3 8 T (南から)



5_4 6 T内2土坑 (井戸か 南から)



5_5 8 T内5土坑 (西から)

【B区】



5_6 4 T (南から)



5_7 7 T (南から)



5_8 14 T (北から)



6_1 13T 5溝群 (北から)



6_2 14T 6溝群 (西から)

【C区】



6_3 2T (北から)



6_4 3T (南から)



6_5 11T (南から)



6_6 2T内11溝および土坑群 (北から)



6_7 11T断面 (西から)



7_1 5T内3溝 (南から)



7_2 5T内3溝 (北から)



7_3 10T内6溝 (北から)



7_4 10T内6溝 (南から) ①



7_5 10T内6溝 (南から) ②



7_6 15T内8溝 (南から) ①

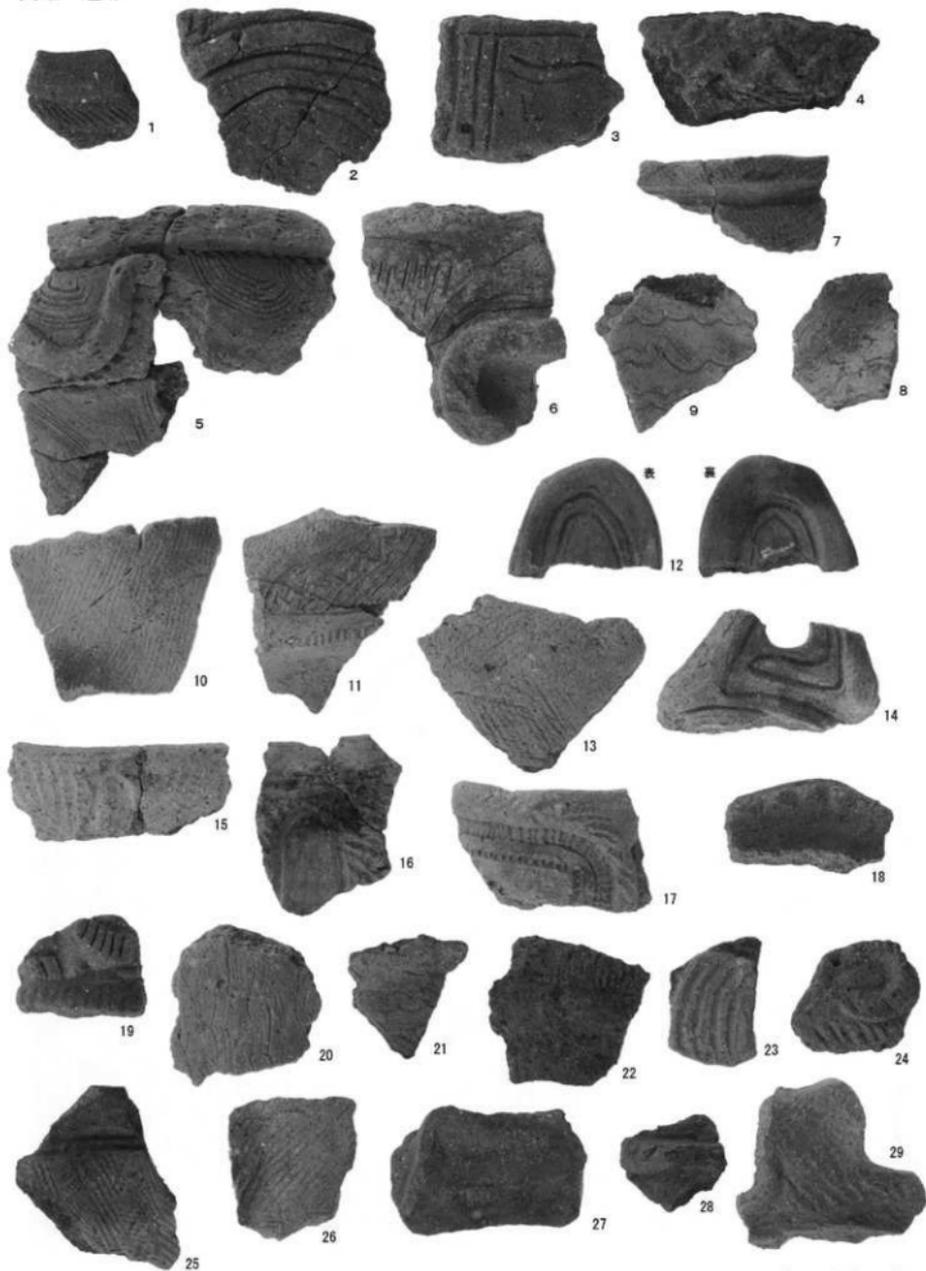


7_7 15T内8溝 (南から) ②



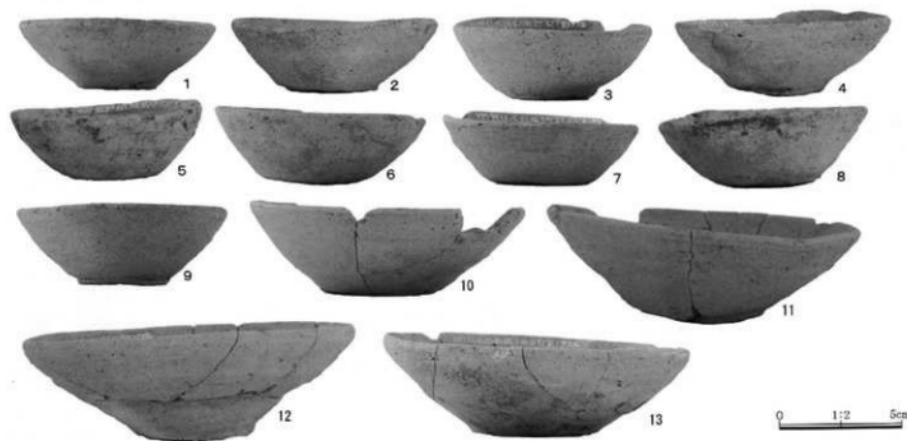
7_8 15T内9溝 (南から)

間堀 1 遺跡

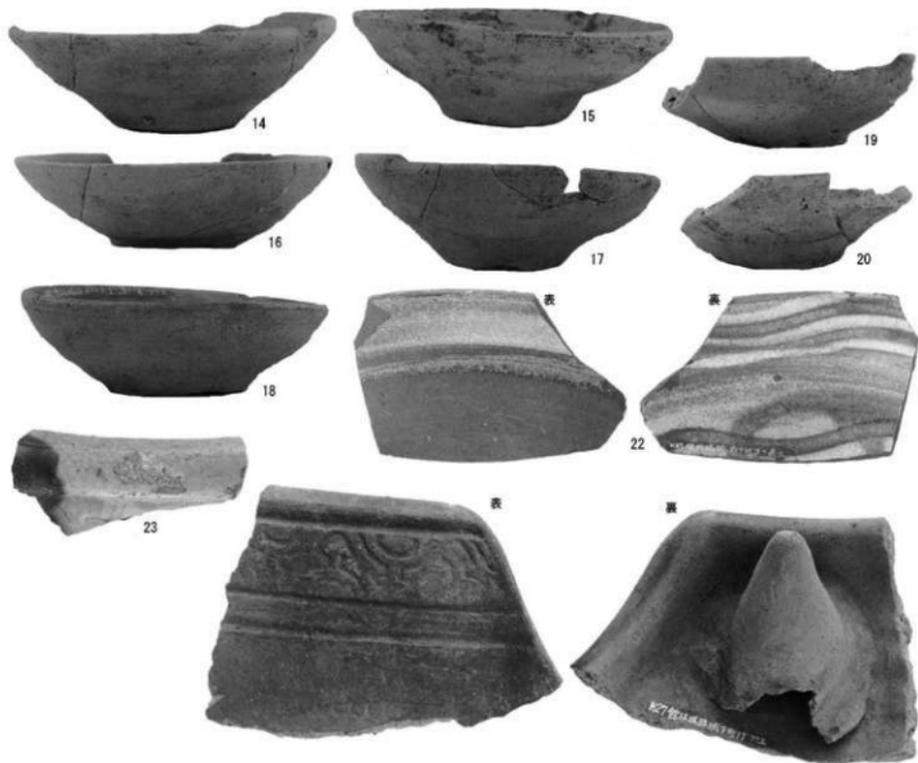




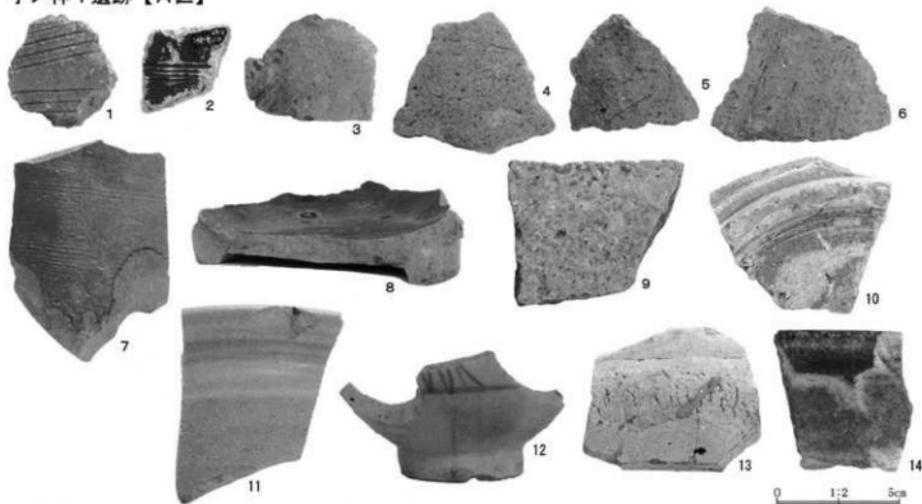
館林城跡・城下町



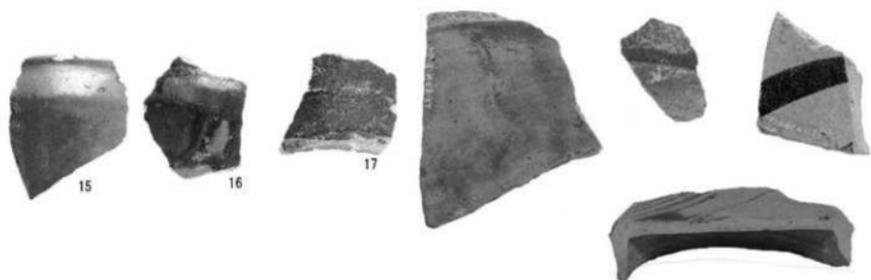
0 1:2 5cm



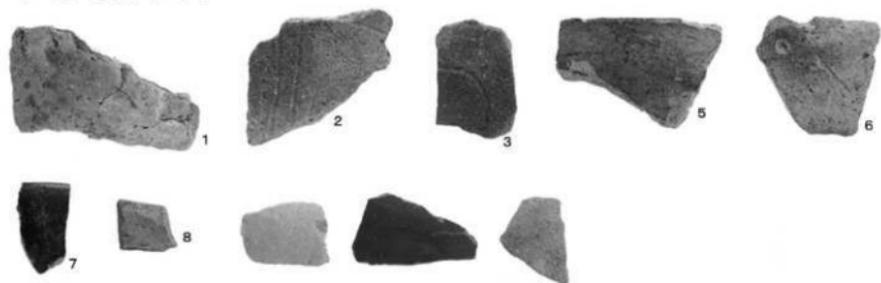
子ノ神1遺跡【A区】



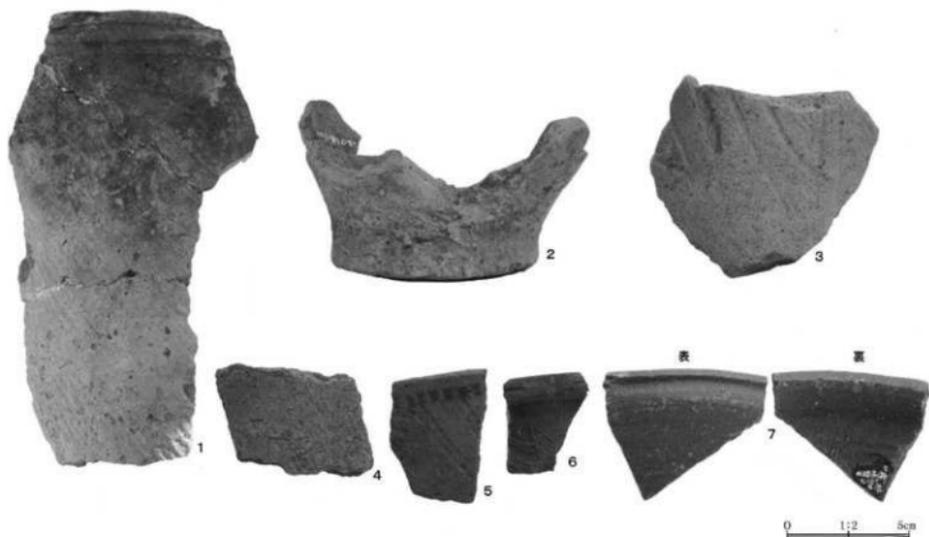
0 1:2 5cm

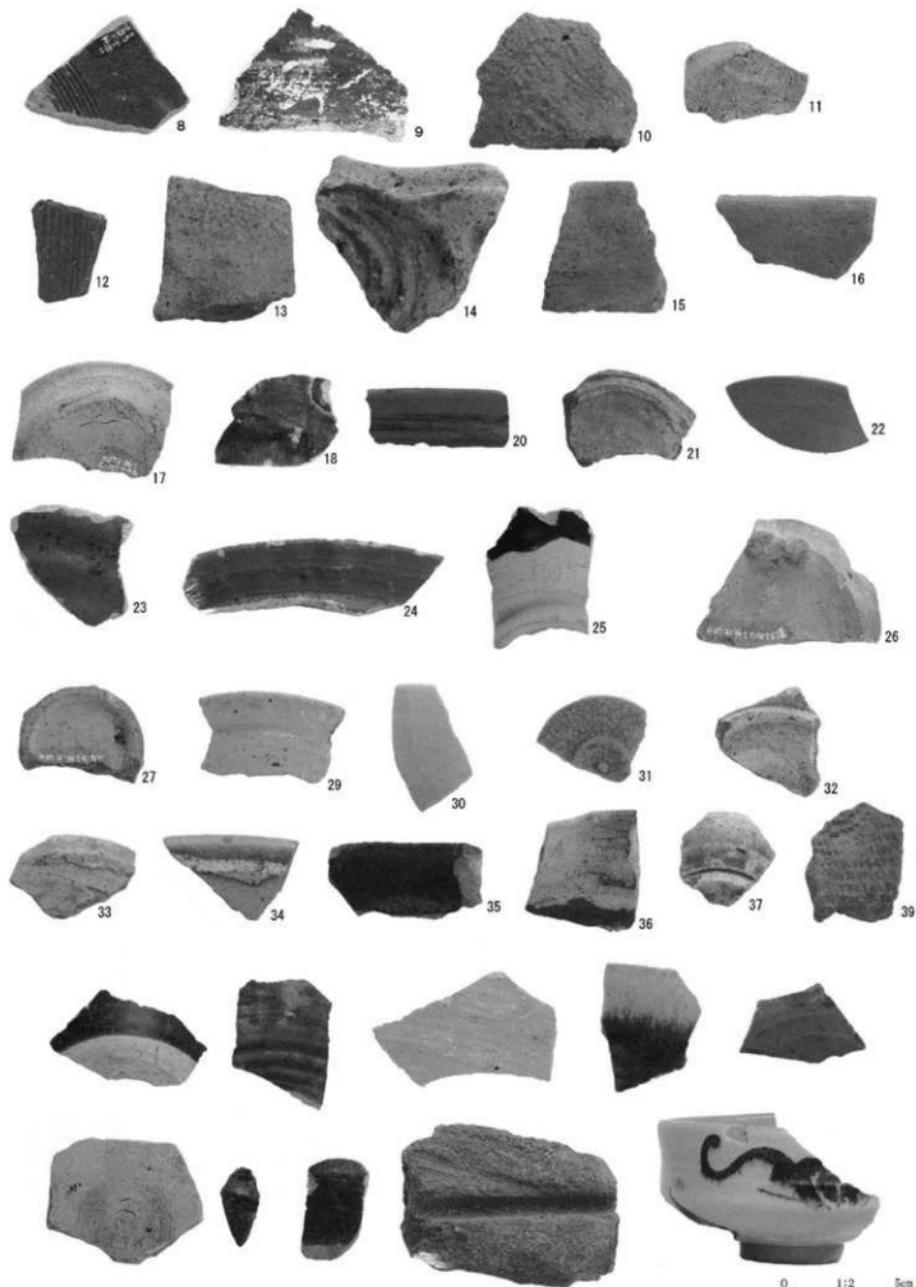


子ノ神1遺跡【B区】



子ノ神1遺跡【C区】





0 1:2 5cm

抄 録

| | | | | | | | |
|----------|--------------------------|------|------------------|-----------|------------------------|----------|-------|
| ふりがな | たてばやししないせきはつくつちょうさほうこくしょ | | | | | | |
| 書名 | 館林市内遺跡発掘調査報告書 | | | | | | |
| 副書名 | 平成26・27年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査 | | | | 巻次 | ————— | |
| シリーズ名 | 館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 | | | | シリーズ番号 | 第53集 | |
| 編集者名 | 奈良 純一 | | | | 編集機関 | 館林市教育委員会 | |
| 編集機関所在地 | 〒374-8501 群馬県館林市城町1番1号 | | | | | | |
| 発行年月日 | 2016(平成28)年3月31日 | | | | | | |
| 市町村コード | 102075 | | | | | | |
| 所収遺跡 | 所在地 | 遺跡番号 | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| 間堀1遺跡 | 上赤生田町字上ノ前 | 116 | 36133488 | 139323945 | 20150201～20150228 | 約143㎡ | 個人住宅 |
| 館林城跡・城下町 | 尾曳町 | 33 | 36144985 | 139324922 | 20150515～20150605 | 約98㎡ | その他建物 |
| 子ノ神1遺跡 | 羽附町字上志柄 外 | 124 | 36135674 | 13933607 | 20150731～20151125 | 約2,669㎡ | 宅地造成 |
| | | | | | | | |
| | | | | | | | |
| | | | | | | | |
| 遺跡名 | 種別 | 時代 | 主な遺構 | | 主な遺物 | | 特記事項 |
| 間堀1遺跡 | 集落跡 | 縄文 | 土坑25・住居跡(縄文)1 | | 縄文土器片・石器(片) | | - |
| 館林城跡・城下町 | 城館跡 | 近世 | 土坑7・溝2 | | 陶磁器片・カワラケ(片)等 | | 慎重工事 |
| 子ノ神1遺跡 | 散布地 | 平安 | 土坑129(井戸3含む)・溝25 | | 陶磁器片・縄文土器片・土師器片・石器(片)等 | | 慎重工事 |
| | | | | | | | |
| | | | | | | | |
| | | | | | | | |

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第53集

館林市内遺跡発掘調査報告書

—平成26・27年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査—

編集・発行 館林市教育委員会 文化振興課 文化財係（館林市文化会館内）
〒374-0018 群馬県館林市城町3番1号 電話0276-74-4111

印刷 上武印刷株式会社
発行年月日 平成28年3月31日



文化財保護シンボルマーク

<http://www.city.tatebayashi.gunma.jp/bunka/>